



国指定史跡 西南戦争遺跡 史跡指定記念

西南戦争 ガイドブック

植木・玉東



植木・玉東 西南戦争遺跡 イラストマップ

目次

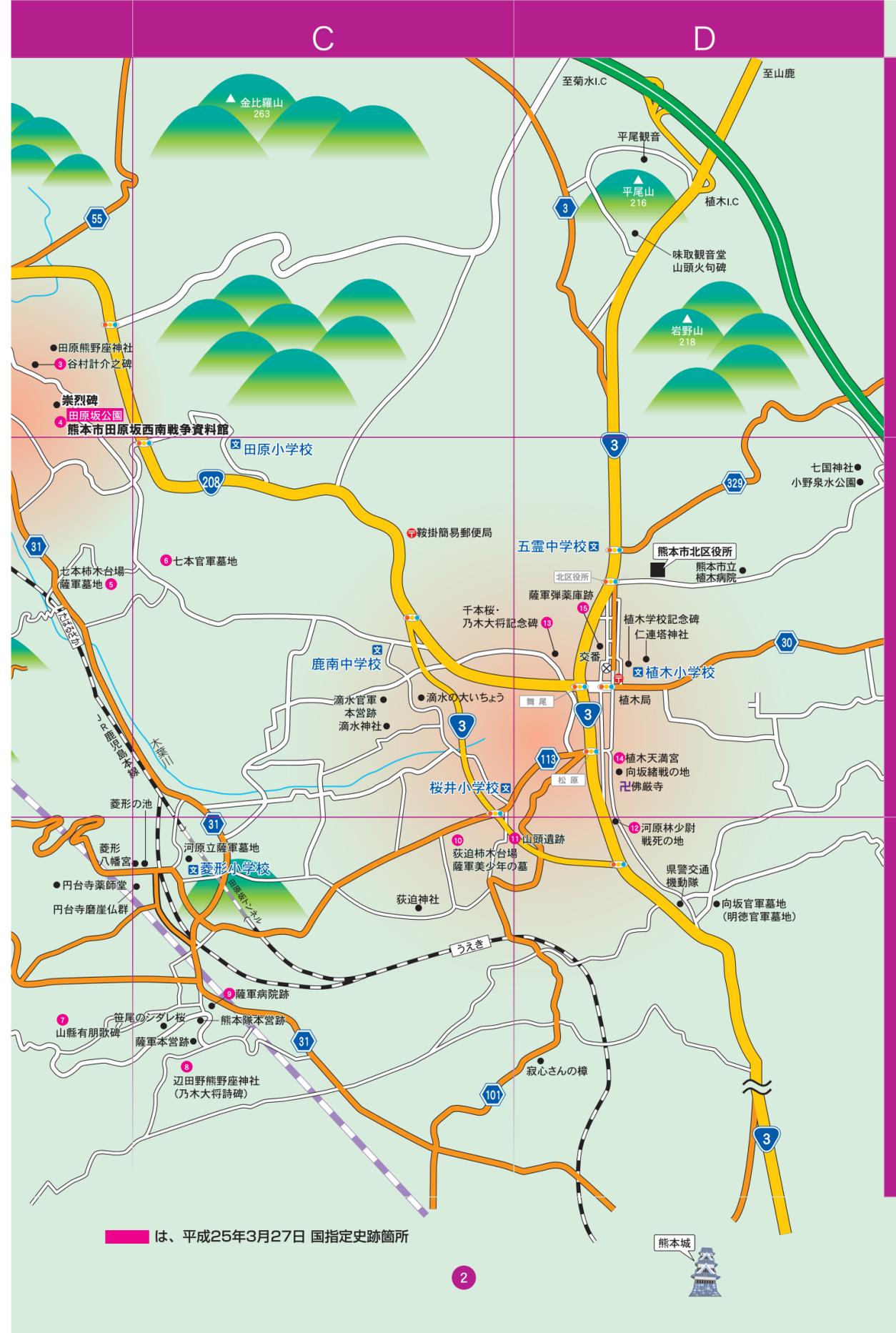
西南戦争遺跡イラストマップ

- 第1章 いきさつとあらまし
 - 江戸時代から明治時代の植木・玉東 …… 3
 - 西南戦争の概要 …… 5
 - 西南戦争激戦の軌跡 …… 7
 - 熊本城攻防戦 …… 9
 - なぜ植木・玉東地域が激戦地となったのか …… 13
- 第2章 各地の戦い
 - 向坂・木葉の戦い …… 15
 - 田原坂をめぐる戦い …… 17
 - 吉次峠の戦い …… 23
 - 横平山の戦い・田原坂陥落 …… 25
 - 県下各地の戦い …… 27
 - 西南戦争終結まで …… 29
- 第3章 その後のあゆみ
 - 全国にある兵士たちの墓 …… 31
 - 日本赤十字社の前身“博愛社” …… 33
 - 日本近代化へのあゆみ …… 35
 - 西南戦争を題材にした文学・映画等 …… 37
- 第4章 附編
 - 両軍の編成 …… 39
 - 人物誌 …… 41
 - 植木・玉東遺跡一覧 …… 43
 - 参考文献 …… 45

西南戦争遺跡を保存する取り組み
 熊本市北区植木町、玉名郡玉東町では、それぞれの区域を越えて存在する西南戦争遺跡の保存・活用に関し、広域的な事業を連携して行なっています。また、遺跡の調査研究、情報収集、保存、活用に関する事業を通し、近代化の礎となったこの出来事を後世に伝え残すよう取り組んでいます。



1



2

1

2

3

江戸時代から明治時代の植木・玉東

植木・玉東のある熊本県北地域は、古の頃より人が集い、多くの遺跡が残っています。古墳時代より、支配者階級である豪族が成長し、古代には製鉄が行われ、経済的にも発展した地域だったと考えられます。また、古来より人の行き来も多く、江戸時代には主要道路（街道・往還筋）が整備されました。植木から流れる菊池川の支流・木葉川では舟運も行われていたといえます。

植木では、江戸時代の初め、豊前街道の宿場町として味取町が栄え、その後三池往還などの分岐点として、味取の南に新しい宿場町である味取新町が開かれます。これが現在の熊本市植木町中心部の基礎となりました。明治時代の初め頃には自由民権運動の日本における先駆的役割を担った植木学校が開かれ、熊本県の自由民権運動の発足の地でもあります。

一方、三池往還の道筋にあり、江戸時代の在郷町として、栄えたのが玉東町の木葉です。当時は農業の傍ら商業を営むところが多かったといえます。

明治時代になると製糸・養蚕業が盛んに行われるようになります。焼き物も盛んで、素焼きの木葉

猿は土産物として東西に名を馳せていました。植木・玉東とも、街道や往還が走り交通の要衝の地として栄えた地域ですが、1877(明治10)年には北上する薩摩軍と、南下する政府軍が衝突する西南戦争激戦の舞台となり、その後は政府が新たな反乱の対応と産業振興のため、1885(明治18)年、北九州～山鹿～熊本～鹿児島を貫く国道を開通させ、さらに九州鉄道(鹿児島本線)を通し、現在の町並みが形成されました。



木葉猿

豊前街道

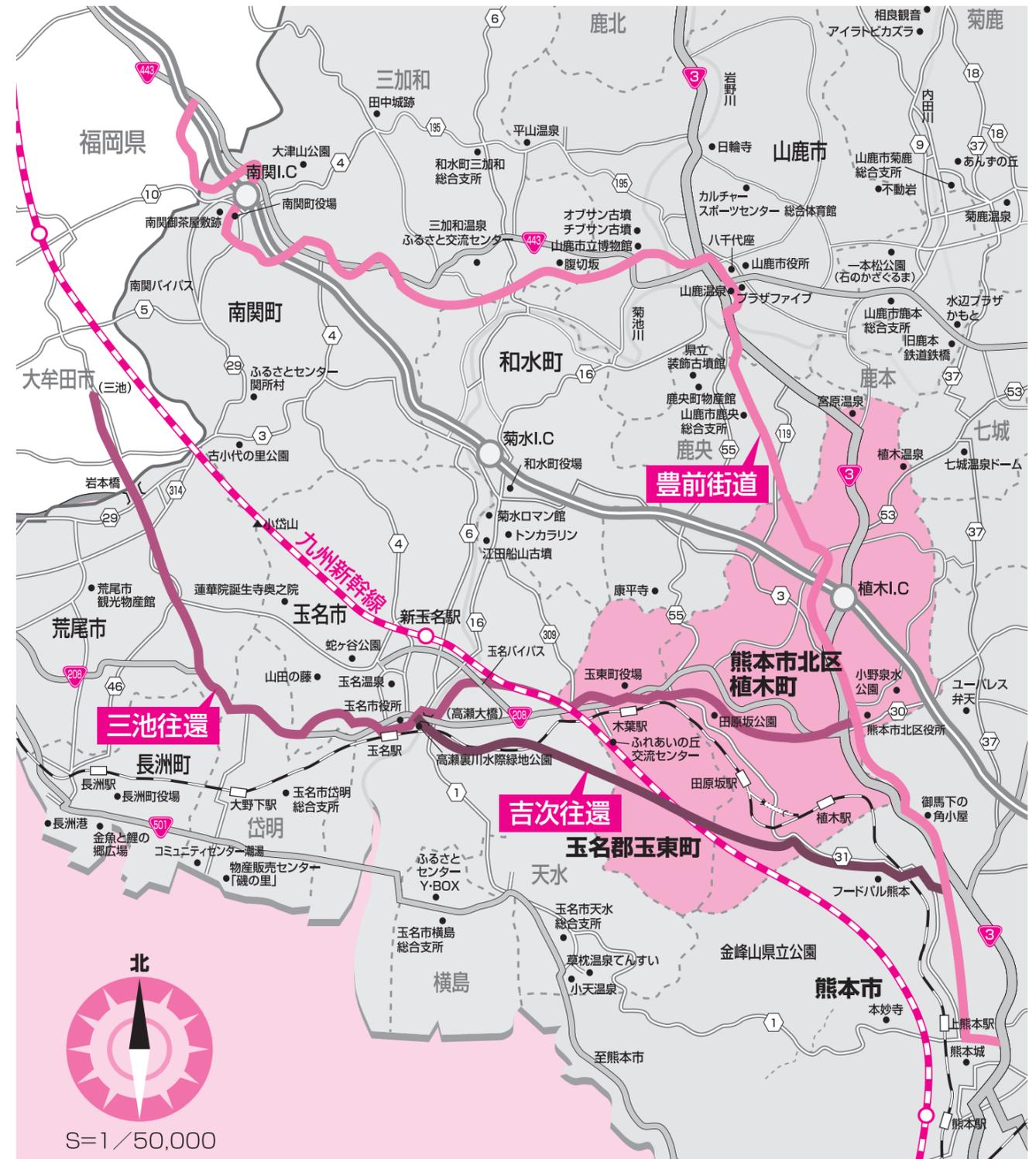
熊本を起点として北上し、植木、鹿央、山鹿、和水から南関を経て豊前・小倉に至る道のことで。参勤交代道として栄え、大名行列の休憩処が設けられるなど、道沿いの町は賑わいをみせていました。

三池往還

植木で分岐しているもう一つの豊前街道の別称です。玉東町木葉、玉名市高瀬、岩本橋(荒尾市)、大牟田三池、江浦から勢高(瀬高)へ繋がるルートです。

吉次往還

熊本城下から玉名市高瀬を結ぶ往還のほぼ中央には、吉次峠があります。熊本への近道として活用された主要道でした。吉次峠は、昔、金売吉次という人物がここで強盗に殺害されたという由来からその名がつけられたとされます。加藤清正が、横島干拓のときにこの道を通り、ぬかるみに石畳を敷いて道を整備したと伝えられています。



トピックス

清正が整備した道

熊本城下の街道には、北へ向かう豊前街道、東へ向かう豊後街道、南へ向かう薩摩街道と日向往還がありました。これらの街道は、加藤清正により整備され、参勤交代道としてだけでなく、商人や旅人が利用する物流の道として使われていました。

西南戦争の概要

とう ばく いしん 倒幕と維新、時代の 転換期をむかえた日本

江戸時代末期、1853(嘉永6)年、アメリカ海軍東インド艦隊司令長官ペリーが率いるアメリカ艦隊(黒船)が浦賀湾に入港し、鎖国制度で長く国を閉ざしていた日本に、開国を要求します。これより幕末動乱の時代が始まり、日本は近代国家への時代の変動期を迎えます。このような中、鎖国を続け外国を排除すべきだという攘夷論と、外国と通商すべきであると主張する開国論が対立します。また、政権を天皇に帰すべきだという尊王論が台頭し、江戸幕府を倒して新しい国家を作ろうという倒幕運動が加速して行きました。

最終的に、1867(慶応3)年、江戸幕府第15代将軍徳川慶喜が政権を明治天皇に返上した大政奉還により260年以上もの間続いた江戸幕府は終わりを告げ、明治時代が始まります。

この大政奉還に大きな影響を与えた藩の一つが、尊王攘夷論を強く主張していた薩摩藩(鹿児島県)で、薩摩藩士、西郷隆盛は、日本を近代化に導いた明治維新の原動力となった人物でした。

大政奉還後、政権を握った倒幕派は、王政復古の号令を発し、天皇を中心とした国家、明治政府を樹立しました。この新政府は、倒幕運動で、活躍した薩摩藩・長州藩(山口県)が中心となり、旧幕府勢力を戊辰戦争で一掃します。そして、版籍奉還や廃藩置県を断行し、新政策により江戸時代までの地方分権体制から、中央集権の体制を確立して行きます。また、「富国強兵」「殖産興業」などを旗印に近代化を進め、学問から産業まで西洋からの文化を取り入れていきました。こういった新制度の中には、江戸時代までの支配階層であった武士の特権を奪う、廃刀令や秩禄処分などがあったため、次第に新政府に対する士族(武士)の不満が噴出するようになります。

士族の反乱は、1874(明治7)年の佐賀の乱、1876(明治9)年、神風連の変(熊本県)、秋月の乱(福岡県)、萩の乱(山口県)と広がり、ついに最大の内乱、西南戦争を迎えます。

萩の乱(山口県)(1876年10月)神風連の変、秋月の乱に呼応し、元参議の前原一誠ら士族約200人が決起。

秋月の乱(福岡県)(1876年10月)神風連に呼応して旧秋月藩の士族約400人が挙兵。

佐賀の乱(1874年2月)元司法卿の江藤新平ら士族が起こした反乱。乱後、江藤らは処刑された。

神風連の変(熊本県)(1876年10月)太田黒伴雄ら旧肥後藩士族約170人が廃刀令に対して起こした反乱。

各地における士族の反乱



**さいごう たかもり
西郷 隆盛**(1827~1877)
薩摩藩出身、士族、政治家。幕末の志士として、また明治維新の立役者として名を馳せた。若いころは薩摩藩の政治活動等に奔走し、のちに坂本龍馬の仲裁のもと長州藩と薩長同盟を結び、倒幕に力を入れた。非常に人望が厚く、藩内外の人々から慕われ、また明治天皇も、少年期に西郷隆盛が教育係だったことから親しい間柄だった。各地に西郷隆盛に関するエピソードは多く残り、特に戦争で田畑が荒れ、住民の暮らしを壊してしまうことを心配していたということは、今も語り継がれている。西南戦争で総大将となり最後を遂げた後も、生存説が流れるほど“西郷さん”の人気は絶大なものだった。

士族による日本最大の内乱「西南戦争」

明治新政府の参議となり、近衛都督、陸軍大将も兼ねていた西郷隆盛は、1873(明治6)年、朝鮮の開国を急ぐ政策を打ち出します。しかし反対派に破れ、参議を辞職。鹿児島(旧薩摩藩)へ帰郷します。これに殉じ、当時新政府の中心的役割を担っていた鹿児島出身の官僚や軍人約600人も辞職。西郷とともに鹿児島で士族を中心とした私学校(銃隊学校、砲隊学校、幼年学校)を設立します。

この間、急速な近代化を推し進める藩閥官僚中心の新政府に対し、日本各地で旧士族の不满は高まり、反乱が発生。明治政府は士族の軍事集団である、私学校の動きを警戒し、鹿児島にあった弾

薬製造所を大阪へ移転しようとし、それに先立ち密かに兵器弾薬を大阪に移送しようとしたことに、私学校生徒らが激怒。政府の陸軍火薬庫を襲い弾薬約6万発を奪う事件が発生しました。また、政府は、私学校の動向を探る密偵を派遣しており、そこに西郷隆盛暗殺計画の目論見があったとして、これを政府の非行として、「政府尋問の為」挙兵、東上することが決定しました。

当初、西郷隆盛は、挙兵に対して沈黙を守っていましたが、私学校生らにおされてついには「自らの命をあずける」と、決意したと伝えられています。

トピックス

職を失った士族たち

明治維新後、職を失い困窮した士族の中には、慣れない商売を始める者もいました。しかし、その多くは失敗に終わり「士族の商法」として揶揄されました。錦絵には、偉そうに接客する士族が描かれたものがあり、「熊鹿戦べい」など西南戦争に関連する菓子名もみられます。



早稲田大学図書館蔵

世界と日本の動き

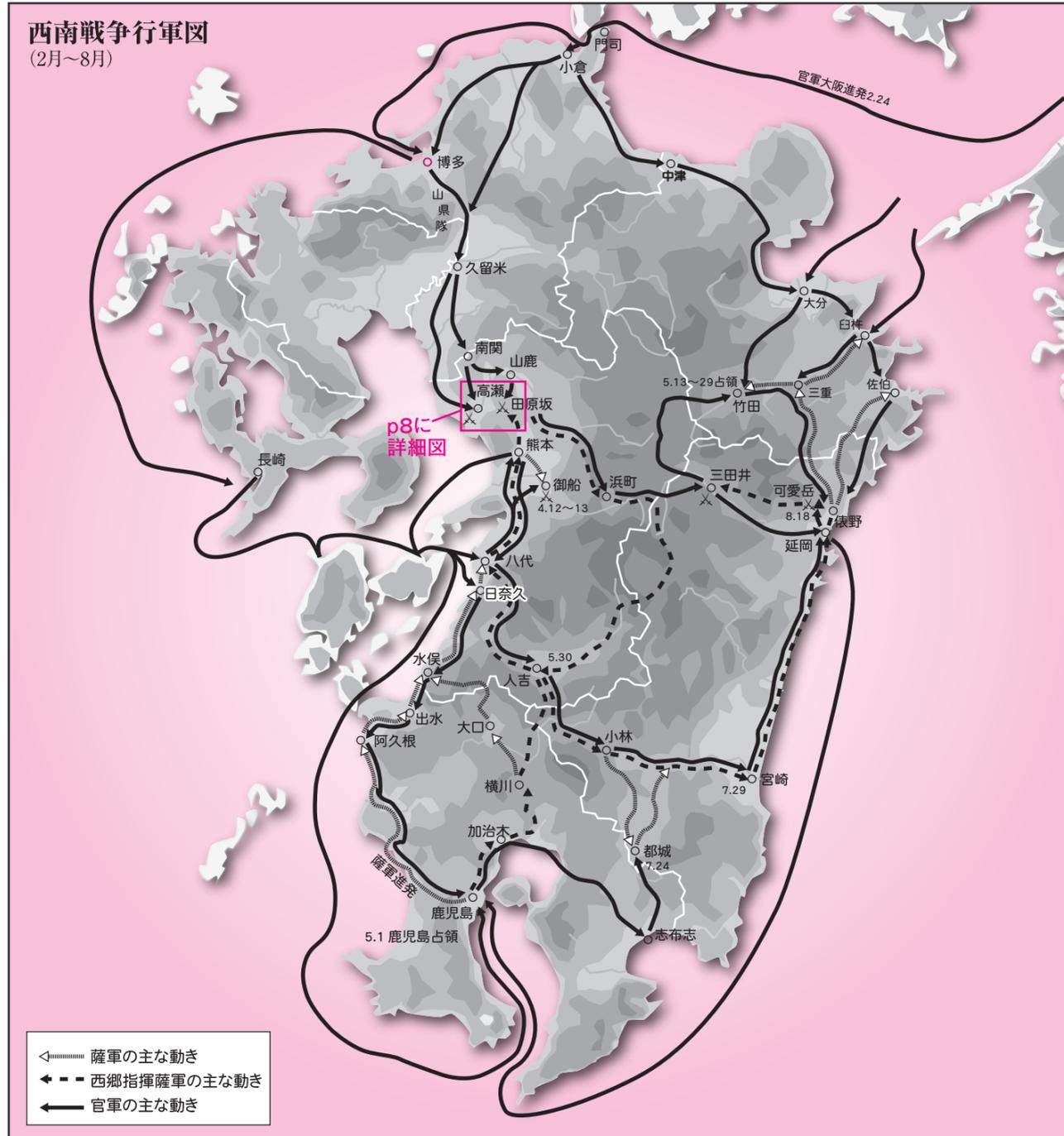
世界の動向

- 1840 アヘン戦争
- 1842 南京条約
- 1851 太平天国の乱
- 1856 アロ-戦争
- 1859 ダーウィンが「種の起源」を著す
- 1860 イタリア ソルフェリーノの戦い
- 1860 北京条約
- 1861 アメリカ南北戦争(～1865)
- 1861 イタリア王国が建国
- 1863 アメリカ大統領リンカーンが黒人奴隷解放宣言
- 1867 スウェーデンのノーベルがダイナマイトを発明
- 1867 赤十字規約を採択
- 1867 スウェーデンのノーベルがダイナマイトを発明
- 1869 スエズ運河が開通
- 1870 普仏戦争
- 1871 ドイツ帝国成立(～1918)
- 1877 アメリカのエジソンが蓄音機を発明
- 1879 エジソンが白熱電灯を発明
- 1879 イギリスがインド帝国をつくる
- 1879 エジソンが白熱電灯を発明
- 1879 墺独伊三国同盟
- 1895 ドイツのレントゲンがX線を発見
- 1896 第1回近代オリンピック競技
- 1897 ドイツのディーゼルがディーゼル機関を完成

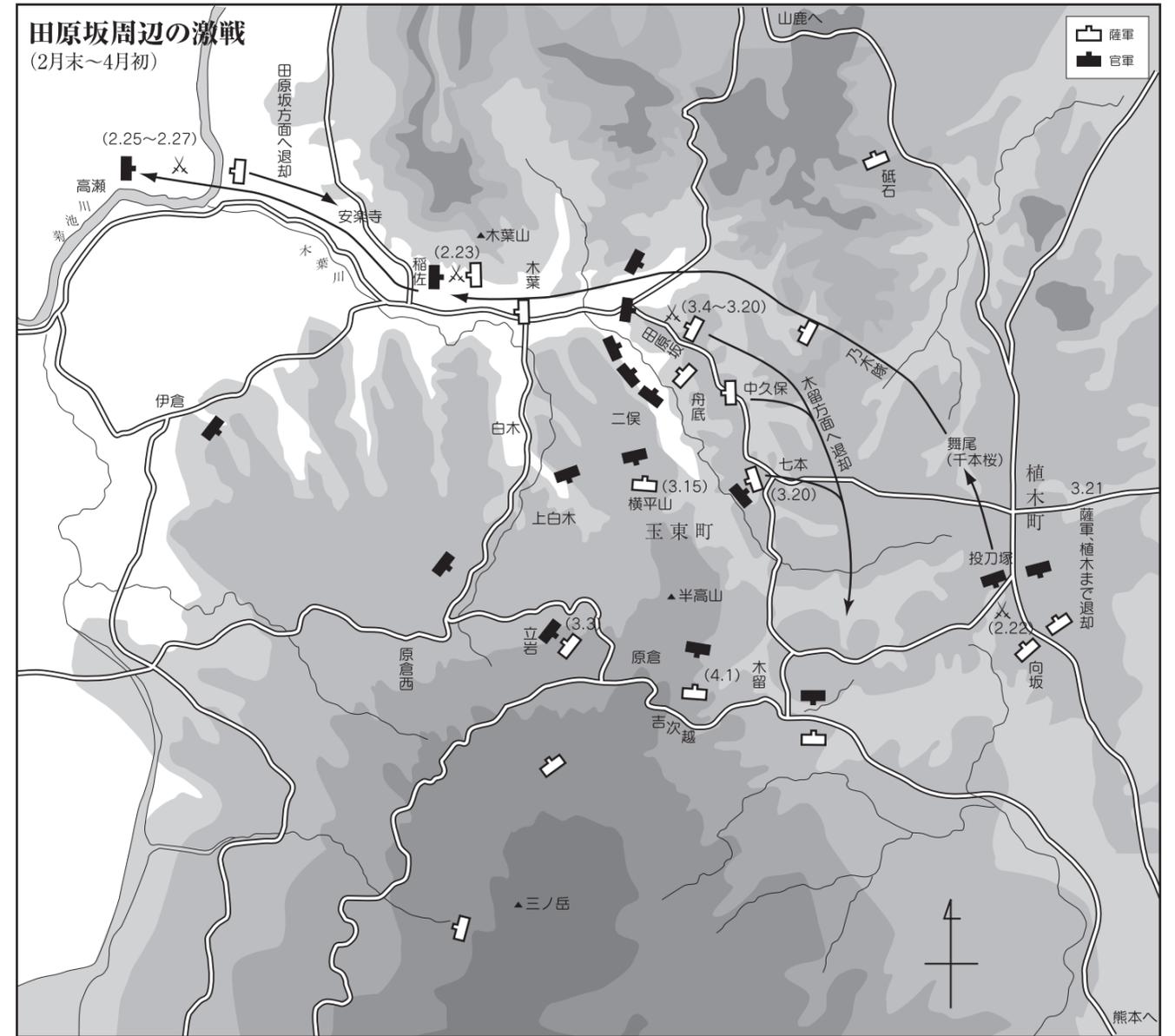
日本の動向

- 1853 ペリーが浦賀に来航する
- 1854 日米和親条約が結ばれる
- 1858 日米修好通商条約が結ばれる
- 1860 桜田門外の変が起こる
- 1862 生麦事件が起こる
- 1863 薩英戦争が勃発する
- 1866 薩長同盟が成立する
- 1867 大政奉還
- 1868 戊辰戦争が起こる
- 1869 版籍奉還が行われる
- 1871 廃藩置県が行われる
- 1873 地租改正が始められる
- 1874 民選議院設立建白書が政府に提出される
- 1877 **西南戦争が起こる**
- 1881 国会の開設を政府が約束する
- 1885 内閣制度発足
- 1889 大日本帝国憲法が制定される
- 1894 日清戦争がおこる
- 1895 下関条約が調印される
- 1902 日英同盟が成立
- 1904 日露戦争が起こる

西南戦争激戦の軌跡



植木・玉東激戦の軌跡



S=1/25,000

熊本城攻防戦

薩摩軍挙兵

1877(明治10)年2月14日、50年来ともいわれた大雪の中を、総勢1万3千人の各隊が3道に別れ次々に鹿児島を出発。全軍は一路東京を目指して北上、20日には先鋒が早くも川尻に到着します。

薩摩軍側は、熊本鎮台総司令官谷干城少将に、西郷隆盛の名で通達を届けます。その内容は、

『拙者儀 今般政府へ尋問の廉有之 明後十七日 県下發程 陸軍少将桐野利秋 陸軍少将篠原国幹 及び旧兵隊の者共随行致候間其臺下通行の節は 兵隊整列指揮を受被るべく 此段照会に及候也』

薩摩軍が熊本城下を通る際は兵隊を整列させ、西郷大将の指揮を受けるようにという指示でしたが、すでに薩摩軍に抗戦を決定していた政府の命令を受け、熊本鎮台はこれを拒否し、熊本城にて戦闘が始まります。



谷 干城(1837~1911)
土佐藩(高知県)出身、士族。陸軍少将政治家。尊王攘夷運動に参加。長崎、上海視察後、西郷隆盛らと倒幕運動に加わった。戊辰戦争では大軍監として東北に転戦。佐賀の乱を鎮める任務にあたり、神風連の**変**後、熊本鎮台司令長官に再任した。西南戦争では2カ月に及び籠城で、薩摩軍の攻撃に耐え、熊本城を死守した。後に伊藤博文内閣の農商務大臣となった。

開戦の前夜、炎上した熊本城

谷干城少将は、幕末動乱の時代から、歴戦を生き残ってきた精鋭による薩摩軍の数と兵力を相手に、城を出ての戦いは勝算が無いと判断し、籠城作戦をとることを決定しました。2月18日、熊本市内に住む陸軍将校らの家族たちも熊本城内に入ります。同日に熊本県庁が熊本市中の住民らに避難指示を発令し、号砲3発を合図に、熊本城の城門が閉鎖され、城下は騒然となりました。19日には、「鹿児島賊徒征伐」の勅令(天皇の命令)が下り、薩摩軍を反乱軍として開戦布告しました。

同日、熊本城で出火。これは戦略上、障害物を取り除き、見晴らしをよくするために、本丸御殿や、天守閣を焼き払ったとする自焼説や、失火説、放火説など諸説があり、まだ原因については決着していません。



桐野 利秋(1838~1877)
薩摩藩(鹿児島県)出身、士族。貧しい中で成長したが、武芸に優れ「人斬り半次郎」の異名をもつ。西郷隆盛の信頼を得て、鳥羽・伏見の戦いで奮戦。陸軍少将の位を得る。熊本鎮台司令長官、陸軍裁判所長を歴任したが、西郷を慕って鹿児島へ帰り、篠原国幹、村田新八らと共に私学校の運営に携わった。西南戦争では四番大隊長を務め、薩摩軍総指揮官として最後まで戦い、城山で西郷らとともに自害した。



熊本城前、高橋公園にある谷干城像

党薩諸隊の編成

薩摩軍挙兵の報を受け、旧肥後藩の士族たちは、明治維新に乗り遅れた思いもあり、薩摩軍への参戦の議を決します。この約4カ月前、熊本で廃刀令に反対した敬神党による士族反乱「神風連の変」が起きた際、これに同調しようとした動きもあり、熊本では乱の鎮圧後もその余波で不穏な状況が続いていました。旧肥後藩士らで形成された学校党は、かねてより旧薩摩藩士らの動きを探り、頻りに鹿児島を偵察するなど、薩摩軍参加への論議を重ねていました。

2月22日、薩摩軍が熊本へ入り、熊本城攻撃が始まると、学校党の士族たちは熊本の健軍神社に集結し、議論を重ねた結果、薩摩軍に参戦を決定します。池辺吉十郎大隊長の下、約1,500人からなる熊本隊が結成されました。薩摩軍に参加した各地の軍隊、党薩諸隊中最大の勢力となるこの中には玉東町出身の櫻田惣四郎も参謀として参戦します。また、植木学校を創設した自由民権運動家の宮崎八郎のもとに結成された熊本協同隊では、選挙で幹部を選出し、薩摩軍に参加します。その参戦の動機は、時代を見据え、将来への自由民権、民主化の推進といった民主勢力としての参戦でもありました。党薩諸隊には各地より1万数千人が集まります。



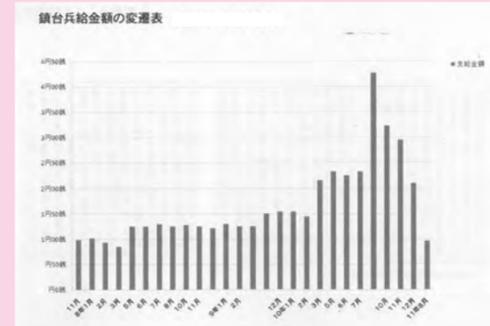
植木学校記念碑(MAP D-2)



宮崎 八郎(1851~1877)
肥後藩(熊本県)荒尾市出身。藩校「時習館」で学んだ後、上京し、自由民権運動のリーダーとして活躍。民権学校「植木学校」を創設した。西南戦争では「熊本協同隊」を率いて薩摩軍と共に戦い、八代にて戦死。

トピックス

ある鎮台兵の給料



戦況の悪化とともに、支給額は増加し、終戦時には開戦前の3倍近くになっています。

トピックス

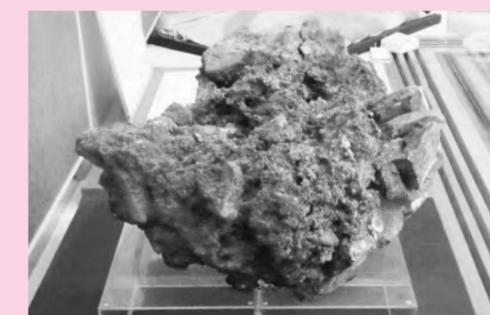
ちんだい 鎮台

1871(明治4)年に設置された旧日本陸軍の軍隊の単位。1873(明治6)年には東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本の6つの鎮台がおかれ、その下に14個の歩兵連隊がおかれます。主に徴兵によって集められた兵で構成されました。1888(明治21)年には師団という単位にかわります。

トピックス

熊本城にて謎の失火

1877(明治10)年2月19日の午前11時10分ごろ、思いがけないことが起こります。籠城準備が進んでいた熊本城内で火事が発生し、熊本城天守閣と本丸御殿が全焼。火事の原因は、台所からの失火、薩摩軍による放火、そして、籠城への決意や戦いへの気持ちを高めるために官軍将校らが自ら火をつけたという説もありますが、いまだ謎に包まれています。



熊本城の発掘調査にて出土した焼けた瓦

熊本城総攻撃

1877(明治10)年2月22日早朝。薩摩軍は、かつて熊本鎮台司令長官だった桐野利秋の指揮のもと、城の三方向から二日間に及ぶ熊本城総攻撃を開始しました。この中には、熊本協同体も加わり、この薩摩軍攻撃に対し、熊本城の政府軍も砲撃で応戦します。熊本城周辺はたちまち戦火に見舞われました。しかし、城は容易に攻め落とすことはできず、戦いは翌日に持ち越されます。

翌日、更に薩摩軍の攻撃は激化し、特に、熊本城の西側にあたる段山からの狙撃は正確で、城を守る政府軍兵士は次々に銃弾に倒れたといひます。その時、包囲する薩摩軍約1万数千人に対し、鎮台兵は約3,400人余りでした。



籠城準備中の熊本城
「西南戦争古写真アルバム」より
写真提供:熊本城頭彰会

難攻不落の熊本城

当初、熊本城の政府軍は劣勢で、長くは持たないと思われました。しかし、熊本城は戦国の世を生き抜き、土木事業や、農業用水、河川改修などの整備事業で現在の熊本の土台を作り上げ、土木の神様と呼ばれた加藤清正が、経験と知恵をそそいで造り上げた名城です。反り返った石垣「武者返し」に代表される籠城を想定した実践向きの城として造られており、ここでその強固な守りが発揮されました。

城は、薩摩軍の猛攻に耐え、熊本鎮台総司令官・谷干城が率いる決死の籠城も持ちこたえ、当初は優勢と見られた薩摩軍も次第に兵力を失い、苦戦を強いられます。その後、薩摩軍は政府軍南下に備えて主力の兵を北上させ、熊本城包囲策へと切り替えます。更に、北上での戦いの激化とともに、薩摩軍の兵力は失われ、城下の川を氾濫させた水攻めなど苦肉の策を講じていくことになります。熊本城攻防戦は、2月22日から4月14日までの間、繰り広げられました。



熊本城の行幸橋際にある加藤清正像

熊本城攻防戦図

注		記	
兵火ノ為消失シタル部	○	砲兵隊	砲
地雷	△	警視隊	警
鹿柴又ハ竹柵	■	歩兵隊	歩
砲兵ノ掩體	□	砲壁(現今ノ散兵壕)	砲
		官軍	官
		賊軍	賊

熊本城守城部隊配備要圖(其一)

明治十年二月二十二日二十三日に於ケル

『熊本城史梗概』



トピックス

「自分は加藤清正に負けたようなものだ」

熊本城の籠城は54日間にも及び、籠城した約3,400人が耐え抜きました。籠城作戦は、戦国時代にも「捨て身の戦法」であり、籠城で勝ちを取めた戦はあまり例がありません。加藤清正がつくった戦国の城は、築城から実に270年もたってからその本領を発揮したのです。退却する西郷隆盛が、「自分は、加藤清正と戦って負けたようなものだ」と語ったと伝えられています。もし熊本城が攻め落とされていたら、西南戦争の結果も変わり、士族の反乱が続いて明治時代の混乱はもっと長引いたかもしれないと言われています。

なぜ植木・玉東地域が激戦地となったのか

植木・玉東地域の地理的背景

薩摩軍は、一部の兵を熊本城の包囲と援軍のために南下してくる政府軍に備えて北上させます。双方の兵が陸路をとる場合、どうしても通らなければならないのが、豊前街道と、三池往還や吉次往還と呼ばれていた交通路でした。

豊前街道は、現在の熊本市から辿ると、国道3号を北上し、山鹿市を抜けて南関町を通り福岡県の大牟田市へとつながっています。一方、三池往還は、国道3号の植木の味取新町で分岐し、田原坂を通して玉名市へと向かっています。これらの道で政府軍と薩摩軍が激突を繰り返し、両軍ともに、多数の兵士が命を落としました。その中でも激しい戦いが日夜行われたのが、三池往還や吉次往還が通る植木・玉東地域一帯でした。

特に田原坂は、当時の大砲を通すことができる唯一の道といわれ、多くの兵士を早く熊本城に向かわせたい政府軍にとっては、極めて重要な地域でした。

熊本城の要害となった山々

植木・玉東地域にある、標高250mの吉次峠、294mの半高山、144mの横平山、そして105mの田原坂。これらは、熊本城の北約10kmの一帯で、南北に連なるように位置し、南下してくる政府軍にとってみれば、熊本城を守るように立つ山城が連なる、「天然の要害」の役割を果たす場所でした。

また、これらの山々は、「台地」とも呼べる平坦さがあり、周囲を見渡しやすいという利点があったため、ここを先に占拠すれば、下から攻める敵を迎え撃ちしやすい要所でした。また、峠は狭く、先に陣地を築き兵士で固めることで、容易に敵を迎撃できる絶好の防御地となりました。これは戦国時代より、加藤清正が先に目をつけ、熊本を守る北の要衝としていました。

田原坂、横平山、半高山(吉次峠) 戦闘鳥瞰想像図 ちようかん



植木 向坂の戦い

(マップ:D-2)

小倉連隊軍旗事件

熊本鎮台に属していた政府軍小倉第十四連隊は、乃木希典少佐が率いており、熊本城入城のために南下していました。しかし、連隊が植木町に到着した時には、熊本城総攻撃が開始されます。熊本城攻撃開始と同じ2月22日の夜、政府軍を迎え撃つため北上していた薩摩軍との緒戦を交えた場所が、ここ植木の向坂でした。

この時、夜戦をしかける薩摩軍の勢いは凄まじく、乃木少佐はひとまず退却を決断します。ところが植木の千本桜付近まで退却した時、連隊旗手の河原林雄太少尉の姿が無く、後にその戦死と、隊の連隊旗が薩摩軍に奪われてしまったことを知らされました。

天皇から頂いた連隊旗を奪われるという事態に、乃木少佐は連隊旗奪還のため、軍を率いて、再び敵中に戻ろうとしますが、部下の必死の説得に止められて断念します。薩摩軍は、その後、援軍を待つ熊本城の兵士たちに、奪った連隊旗を見せつけたと言われており、また、乃木少佐は、この連隊旗を奪われた軍旗事件に際し、失意のあまりこの時自決を計ろうとまでしたといわれています。

植木エリア



河原林少尉戦死の地(MAP D-3)



千本桜・乃木大将記念碑(MAP D-2)

エピソード

乃木將軍は、死ぬまで屈辱を忘れなかった

軍旗が奪われた理由にはいくつかの説があり、本当のところは定かではありません。乃木少佐が後で語ったところによると、河原林少尉に兵士10数人を付け、軍旗を背負って向坂から退却するように命令。ところが河原林少尉が殺され、軍旗が奪われてしまったと伝えています。しかし、政府軍の本営だったらしい場所に置き去りにされていた軍旗を、植木に入った薩摩軍の熊本協同隊の斥候(偵察者)が発見し、持ち帰ったという話もあります。

どちらにしても乃木少佐は、日清戦争、日露戦争に従軍し、陸軍大将となった後も、この軍旗を奪われた事件に対する責任を忘れず、明治天皇の死にともなって殉死する際、遺言に、西南戦争で軍旗を失ったことが殉死の理由の一つであると記しています。



乃木希典 (1849～1912)

明治期の代表的陸軍軍人。西南戦争では小倉歩兵第十四連隊長心得を務め、指揮をとった。ドイツに留学し帰国後、軍紀確立などにかかわった。日清戦争では第一旅団長として旅順を占領。日露戦争では大将、第三軍司令官として出征しロシアの旅順要塞を攻略した。旅順要塞は容易に陥落せず、この戦いで長男、次男が戦死し、激戦地となった203高地でも多くの死者を出し、国民の乃木に対する批判の声もあがった。明治天皇の信任は厚く、明治天皇の大葬の日、自宅で殉死し、夫人もその後を追った。

玉東 木葉の戦い

(マップ:A-1・B-1)

2月22日の植木向坂での戦いの後、乃木少佐率いる第十四連隊は、玉東町の木葉山から二俣まで退き、薩摩軍を迎撃しました。この時、増強された薩摩軍の勢いに圧倒され、前線を守っていた吉松秀枝少佐は、援軍を要請します。しかし、乃木少佐は、政府軍に余力がないと判断し、それを断ります。吉松少佐は決死隊数十名を率いて、自ら前線へ出て指揮をとり、薩摩軍の銃撃を受け、戦死しました。

一方、乃木少佐は、薩摩軍のすさまじい勢いに押され、木葉からの撤退命令を出します。撤退の途中、少佐が乗った馬が銃撃され落馬したところに薩摩軍の兵が迫るとい一幕もありましたが、部下の命がけの援護を受けながら玉名の川床へ辿り着きます。そして25日には政府軍の本隊が南関に

到着し、ようやく乃木少佐は態勢を立て直しました。

勢いを取り戻した第十四連隊は、25～27日の玉名市高瀬の戦いで、優勢に戦いを進め、再び熊本城を目指して進軍します。ここで両軍の形勢は逆転し、薩摩軍はこれより北上できず、田原坂にて政府軍南下を阻止することになります。

政府軍は、前回退却を喫した木葉付近、更に田原坂へ兵を進めました。度重なる戦闘でこの坂の重要性を知っていた乃木少佐は、後方の隊に進軍を急がせます。しかし、意に反して本営からは「撤退」の命令が下りました。この時この坂を越えていれば、後に田原坂が激戦地となることもなく、数千におよぶ戦死者を出すこともなかったかもしれせん。

玉東エリア



乃木少佐奮戦の地(MAP A-1)

吉松秀枝 (1845～1877)

土佐藩(高知県)出身、軍人。鳥羽・伏見の戦いには藩兵隊長として出兵。陸軍少佐第八大隊長となり小倉の第十四連隊に就いた。神風連の変を鎮める任務にあたり、翌年西南戦争では熊本城救援に赴く。木葉において薩摩軍と戦い戦死。享年33。墓は宇蘇浦官軍墓地にある。



高瀬の戦い

熊本城を包囲した薩摩軍はさらにその精鋭を北上させ、熊本城救援に向う政府軍と高瀬にて衝突します。薩摩軍が主要ルート上で最も北に進んだのはこの高瀬の戦いで、以後は守勢にまわります。この戦いで西郷隆盛の末弟小兵衛が戦死。彼は冷静沉着にして思慮深い人物で薩摩軍一番大隊一番小隊長として自ら陣頭指揮を執り弾丸に胸を貫かれて壮絶な最後をとげました。地元に残る話では、近くの民家橋本家の戸板を外して小兵衛を運んだとされています。西郷隆盛は遺体が運ばれてくると、瞬きをただけで終始無言であったそうです。薩摩軍の主力は菊池川を越えて北進することはできず、高瀬の町は戦火で大部分が焼失しました。



西郷小兵衛戦死の碑(玉名市)

田原坂をめぐる戦い

(マップ:B-1・B-2)

木葉山の戦い

2月27日、高瀬から撤退した薩摩軍は、1万2千人の兵力を田原坂、吉次峠、山鹿に送り、政府軍を迎え撃つため約50kmに及ぶ防衛陣地を築きます。これに対し政府軍は兵を補強し、3月3日、玉東町の稲佐・木葉で両軍が激突。政府軍の攻撃を薩摩軍は必死で迎え撃ちますが、政府軍の砲撃に押され、最後には敗退します。この日、政府軍は木葉に本営を設置し、ここを拠点に田原坂攻略を開始しました。

田原坂の戦い 初戦

3月4日、前日の勢いに乗った政府軍がいよいよ田原坂へ進撃し、この日から田原坂17日間の戦いが始まります。薩摩軍も必死に応戦。田原坂のある植木台地には多くの防塁が築かれたといえます。田原坂本道の地形は、左右の畑より道路が低くなっている凹道が蛇行しているため、正面からの狙い撃ちと、両側からの銃撃、更に背後から退路を断たれて斬りこまれるなど、熊本城北の要害として攻

めにくく、守りやすい特徴がありました。

田原坂三ノ坂には、薩摩軍がいくつも塹壕を掘り、土囊を積んだ防塁を築き木柵を幾重にも置き、この坂を越えられないよう防備を固めて猛攻を加えました。そのため、「進む者必ず傷付き、退く者必ず倒れるに至る」といわれ、政府軍は進撃を阻まれ、多くの死者を出しました。政府軍の第一次総攻撃は、失敗に終わりました。

二俣台地からの砲撃

田原坂第一次総攻撃の戦いは激しく、弾薬の消費は予定を大きく上回り、数十万発も使用されたといわれています。第二次総攻撃の田原坂本道正面攻撃も成果があがらず、第三次総攻撃(3月7日～)において、政府軍は、田原坂正面攻撃に加え、田原坂の西側にある玉東町二俣台地を占領し、ここに大砲陣地(砲台)を築き、側面からの攻撃を開始します。砲撃は朝から日暮れまで終日続き、田原坂の薩摩軍に打撃を与えました。



二俣瓜生田砲台跡発掘調査の様子(MAP B-2)

二俣台地の瓜生田、古閑周辺には、政府軍の砲陣地が築かれました。近年の発掘調査ではその痕跡が確認されています。砲撃には分解して運搬可能な“四斤山砲”が主に使用されていました。



四斤山砲(イメージ)

抜刀隊の歌

作詞 外山正一
作曲 シャルル・ルルー

吾は官軍我が敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は
古今無双の英雄ぞ
これに従うつものは
共に剽悍決死の士
鬼神に恥じぬ勇あるも
天の許さぬ叛逆を
起こせし者は昔より
栄えしたるし有らざるぞ
敵の亡ぶるそれ迄は
進めや進め諸共に
玉散る剣抜きつれて
死する覚悟で進むべし

「戊辰の復讐」 警視抜刀隊の活躍

日に日に弾薬が欠乏し始めた薩摩軍は日没から夜にかけて、切り込みによる白兵攻撃で奇襲を繰り返すようになります。兵や物量・情報量で勝るも、農家、商人出身者が多い政府軍は、この白兵戦で大きな打撃を被り、一進一退の攻防が繰り返されました。

これに対抗するため、政府軍は東京警視庁で士族出身の警部・巡査を中心とした警視抜刀隊を組織します。政府軍の抜刀隊は、田原坂や横平山を突破する原動力となって貢献しました。彼らの中には戊辰戦争の際、当時政府軍だった薩摩藩士族と戦い敗れた者らが多く、「戊辰の復讐」と声をあげながら戦ったという話もあります。

抜刀隊の活躍は後々まで語り継がれ、1885(明治18)年、この抜刀隊をモチーフにして歌がつくられました。東京帝国大学教授の外山正一が作詞し、フランス人の陸軍軍楽隊教師シャルル・ルルーが作曲したもので、1~6番まであります。鹿鳴館で発表され、軍歌として親しまれました。

トピックス

民謡 田原坂

雨は降る降る じんばは濡れる

越すに越されぬ 田原坂

右手(めて)に血刀(ちがたな) 左手(ゆんで)に手綱(たづな)

馬上ゆたかな 美少年



美少年の像(田原坂公園内 MAP B-1)

全国にも知られ、民謡田原坂に歌われている、美少年のモデルについてはさまざまな説があります。その一つには、西郷隆盛と共に、城山で最後まで付き添い、ともに戦った村田新八(→P40)の長男・村田岩熊(享年19)が“美少年”のモデルではないかといわれていますが、この戦いで散っていった多くの若者のことと解釈してもよいでしょう。

トピックス

田原坂発掘調査

「田原坂 西南戦争遺跡・田原坂第1次調査」

田原坂の発掘調査では、周辺全域を踏査し、遺構や遺物の分布状況を調べ、地元の方々に聞き取り調査が行われました。西南戦争遺跡詳細分布図を作成し、これにより政府軍の攻撃方向や、薩摩軍陣地を推定することができました。また、後世の開墾などの土地改変がない場所を選定して、金属探知機探査やトレンチ確認調査などを実施し、出土遺物としては、小銃弾が多数発見され、現在も調査継続中です。



調査報告書

弾痕の家(復元) (MAP B-1)

熊本市田原坂西南戦争資料館横にある、西南戦争で被害にあった家を、当時の写真を元に復元したものです。戦場では数多くの銃弾が飛び交い、壁にはその跡が残りました。わたしたちの郷土に住んでいた人々もこの戦争に巻き込まれ、疎開した人も多くいましたが、家財を壊されたり、財産を奪われたり、また強制的に軍を手伝わされた人々も数多くいました。



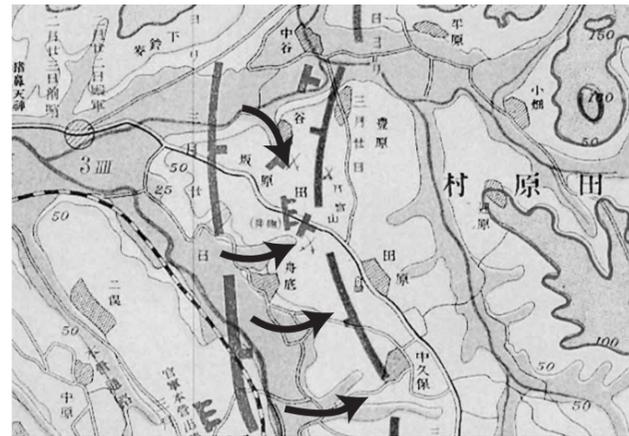
自然の要害 田原坂

「雨は降る降る じんばはぬれる 越すに越されぬ 田原坂・・・」。民謡「田原坂」の歌詞は、政府軍が、ここを死守する薩摩軍の猛攻に押され、ここを突破することの厳しさを歌ったものといわれています。

田原坂が通る台地は、北東にのびる幅1km、長さ2.5kmほどの台地で、東西南北の側面には多くの谷が入り組んでいます。台地の平坦部は狭く、まとまった平地はなく、その中央を三池往還が通り、現在も往時の地形がよく残っています。

加藤清正の頃より、この田原坂の地形は北の要害とされ、北に田原坂を下れば、平野が広がり、逆にこの坂を超えれば、熊本城まで植木・北部台地の平坦地を通り、城までの道が開けます。政府軍は多くの人馬、大量の武器や食糧を運ぶために、この道を

通らざるを得ませんでした。田原坂は、何れも蛇行した地形をしており、薩摩軍はこの両側の崖に塹壕を掘り、鬱蒼とした樹木の間^{うっそう}に壘を築き、地形に応じた守備を固めここを死守しようとします。この地で両軍必死の激戦が繰り返されました。政府軍の参軍山縣有朋^{やまがたありとも}は、この田原坂の攻めにくく、守りやすい地形に「所謂一夫之を守れば三軍も行くべからざる地勢たり。」とその自然の要害、田原坂での戦いを振り返っています。



→ 政府軍の攻撃想定方向

豊岡眼鏡橋

現在も当時とあまりかわらない姿で残る眼鏡橋。1802年につくられたもので、熊本の年代のわかる石造眼鏡橋の中では最も古い。この橋の幅が当時の道の幅と言われています。

(MAP B-1)



現在の田原坂



にしき え 西南戦争錦絵

西南戦争当時の錦絵は、新聞報道や言い伝え、うわさなどをもとに、画家が想像を交えながら、庶民の心情や好みに合うように制作したものです。奮戦する薩摩軍将校や兵士の姿を描いたものが多く、当時の人々が薩摩軍に対して同情や、声援をかけていた状況が読み取れます。



政府軍・薩摩軍の武器、武装



薩摩軍兵士



政府軍兵士

政府軍には、兵士一人ひとりに洋服の軍服(ロシア・厚地の毛織物)が支給され、使用した主な銃器はスナイデル銃という手元で弾丸を装填できる元込め銃で、雨にも強く、銃剣を取り付けたまま銃撃することが可能でした。

これに対し薩摩軍は、統一された軍服はなく、木綿の着物姿に、わらじという雨の日に不利な格好の者も多かったようです。使用した銃は最新式のスナイデル銃やスペンサー銃などの元込め銃の他、旧式のエンフィールド銃など先込め式の銃も使用し、大砲の数も少なかったようです。17日間続いた植木・玉東での戦いは雨の日が多く、多種類の銃を使った薩摩軍は、「一に雨、二に大砲、三に赤帽(政府軍の近衛兵^{このえ})」は、苦手であると嘆いたエピソードが残っています。



両軍で使用された四斤山砲のレプリカ

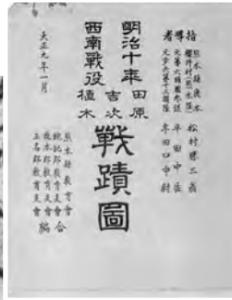
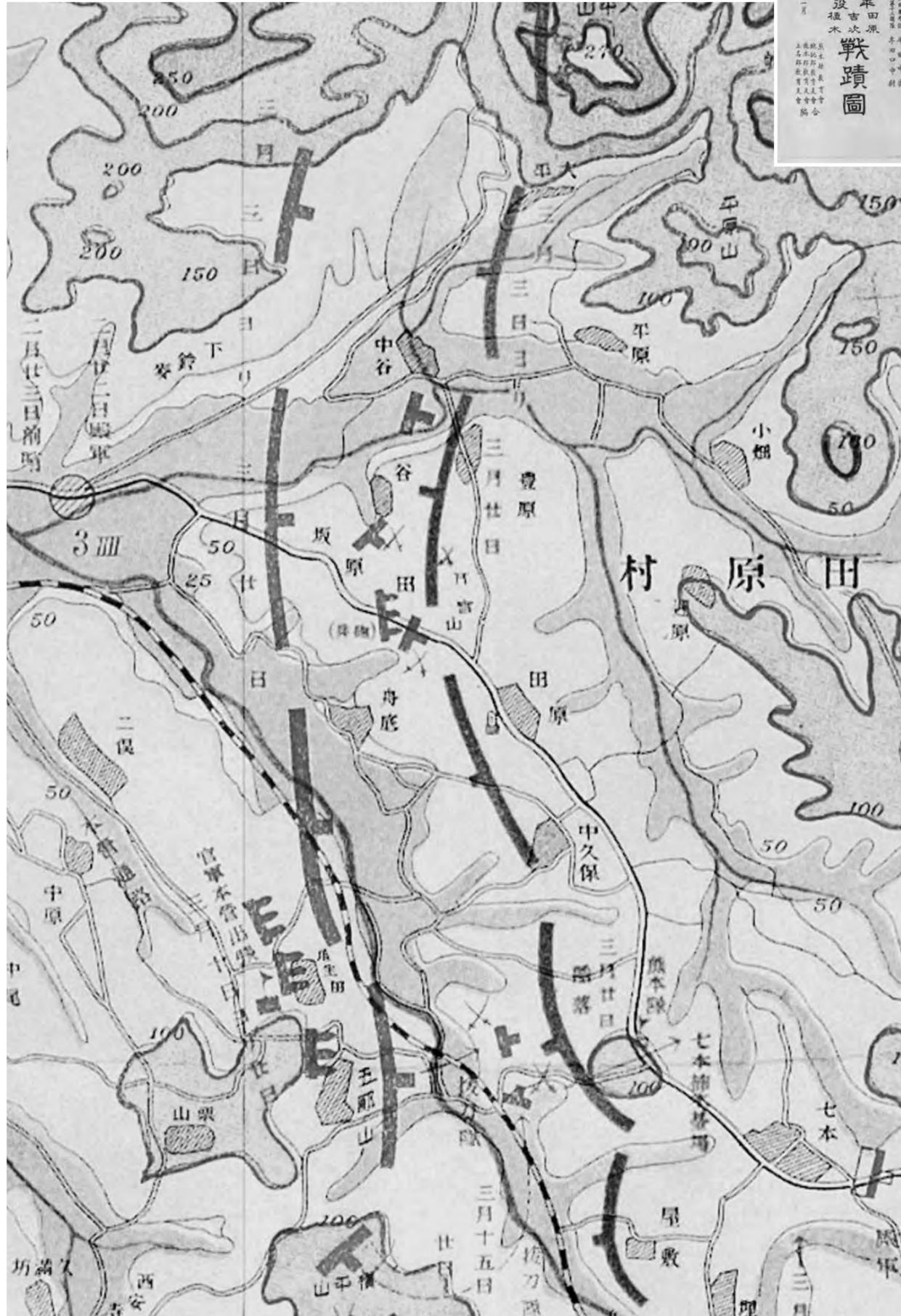


武器 スナイデル小銃

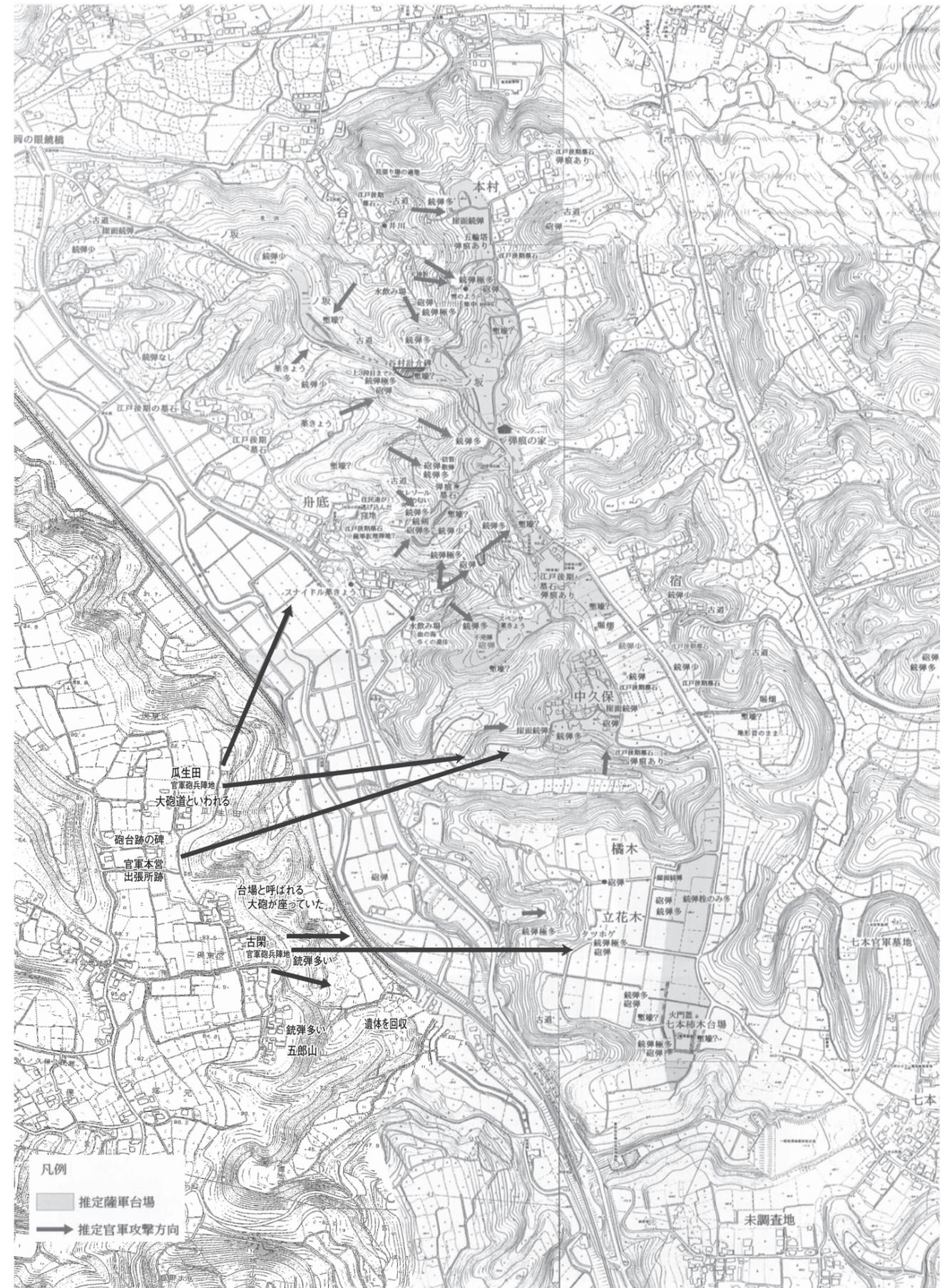
写真提供:熊本市田原坂西南戦争資料館

◆ 第2章 各地の戦い

明治十年 西南戦役 田原、植木、吉次 戦跡図



田原坂周辺分布調査及び聞き取り調査図



S=1/8,000

出典:第5集『田原坂』
西南戦争遺跡・田原坂第1次調査

玉東

きち じ とうげ

吉次峠の戦い

(マップ:B-3)

熊本隊死守の地“吉次峠”

高瀬から東南にある熊本城まで、直線にしておよそ30km。その間には、小さな丘や谷が無数に起伏しており、平地部が少ないのが特徴です。標高600mの金峰山系列の山がそびえ、当時、地域を結ぶために整備された道路は、先述の田原坂を通る三池往還、そして高瀬と大窪(熊本市)を結ぶ吉次往還でした。比較的なだらかな三池往還の道筋に対して、吉次往還は山道といってもよく、途中には三ノ岳と半高山に挟まれた難所“吉次峠”があります。まさに天然の要害。守るに易く、攻めるに難い吉次の地は、薩摩軍、及び熊本隊で守られることとなります。

旧肥後藩士・池辺吉十郎とともに、熊本隊として薩摩軍に参加したのは、同じく旧肥後藩士だった佐々友房です。彼は熊本隊一番小隊長として戦い、玉名の高瀬につながる近道であった、吉次峠の重要性には当初から目を付けていました。

2月24日、佐々率いる熊本隊は、政府軍を迎え撃

つため吉次峠を越えます。翌25日、玉名の高瀬まで進んできた政府軍と交戦し撃退。しかしその後、政府軍の反撃にあい、2月26日、吉次峠まで退却します。

この時、熊本隊は、吉次峠からすでに薩摩軍が退却していることを知りました。しかし、このまま熊本隊も吉次峠を捨てて退却すれば、戦略的に重要なこの地が政府軍に奪われます。佐々は、「吉次峠は城北随一の要害であり、今これを失えば百の西郷がいても、熊本の陣地を保つことはできない。このままここにとどまって死ぬのも、退却して十日後に死ぬのも同じ。それならば、吉次峠を死守する」と決意し、隊の兵士たちを奮い立たせ、刀で傍らの木の肌を削り取り、そこに、「敵愾隊悉く此ノ樹ノ下ニ死ス」とその決意を墨で黒々と記したそうです。



佐々友房の詩碑(MAP B-3)

さっさ ともみさ
佐々 友房(1854~1906)

肥後藩(熊本県)出身、政治家、教育者。西南戦争では熊本隊一番小隊長として戦い、降伏後収監された。出獄後、国家の人材養成を目的とした学校、同心学舎(後の済々黌)を同志と共に熊本に創設。さらに帝国議会開設に備え熊本国権党を設立し、副総理に就いた。帝国議会開会とともに熊本県第1区選出衆議院議員となり、没年まで連続当選。「戦袍日記」著者。

地獄峠とよばれた吉次峠での激戦

3月3日、玉名方面から伊倉、吉次峠を越え、熊本市へ向かうため進撃してきた政府軍を、薩摩軍が迎え撃ち、10万発以上の弾丸が飛び交いました。吉次峠における戦いは、両軍互いに肉薄し、敵の顔が見えるほどの距離で撃ちあいが行われ、白兵戦が繰り返されたといえます。峠をねらっていた政府軍ですが、進撃方向を半高山から、さらに北の耳取山に変えます。そこで半高山に陣取る薩摩軍に対して一斉射撃を行いました。最近の調査では、半高山の山肌から大量の小銃弾が検出されており、まさにその様子を物語っています。

佐々友房が「吉次の険は城よりも険なり」と詠った吉次の険は、薩摩軍に有利に働きました。たった2日間で、薩摩軍戦死者数名に対して、政府軍は

100名以上の死傷者を出すこととなります。

以後、政府軍はこの峠を“地獄峠”と呼び、1個大隊を配備し、守備に徹することとなります。

田原坂陥落後の3月20日以降もしばらく薩摩軍は政府軍の進撃を阻止していましたが、横平山から回りこんだ政府軍によって半高山が落ち、立岩からの攻撃によって吉次峠も奪われたため、薩摩軍は撤退し、三ノ岳の山中に陣を移します。

今日の吉次往還は広域農道が緩やかに走り、西は有明海、東は熊本市内が一望できる絶景の地ですが、当時は、かつて加藤清正が朝鮮半島から持ち帰ったといわれる朝鮮松の大木が鬱蒼と茂っていたといえます。また吉次峠は平坦な地が無い程の急勾配であったということ。「地獄峠」の様相が偲ばれます。

エピソード

しのはら くにもと
篠原国幹の戦死

吉次峠で政府軍を退けた薩摩軍でしたが、薩摩軍の一番大隊を指揮していた篠原国幹が撃たれて戦死。軍を率いる幹部を一人失ったことは、薩摩軍にとって大きな痛手となりました。

旧薩摩藩士だった篠原国幹は、明治政府では陸軍少将を務めましたが、西郷隆盛とともに鹿児島へ帰りました。西郷の信頼も厚く、軍人として勇猛さで知られ、吉次峠での戦い

でも、隊長である自分が、マントを着て太刀を持った勇壮な姿で陣頭に立つことで、兵士たちを奮い立たせようとしています。この時、政府軍の

中に、篠原国幹を見知っていた江田国通少佐がいました。江田少佐は射撃兵に、「マントを着た人物を撃て」と命令し、篠原は銃弾を浴びて亡くなりました。江田少佐もその後、復讐に燃える薩摩軍兵士に狙撃されて戦死。薩摩軍の二本木本営に運ばれた篠原の遺体の側で、西郷は大粒の涙を流したと伝えられています。



篠原国幹(1837~1877)



篠原国幹戦没の地(MAP B-3)

エピソード

たにむらけいすけ
密偵・谷村計介

(1853~1877)

明治時代の軍人。熊本鎮台に入り、佐賀の乱、台湾出兵などを経験し、西南戦争の際、谷干城の命で高瀬の政府軍と連絡をとるため薩摩軍に包囲された熊本城から脱出。一度は吉次峠にて薩軍にとらわれますが、逃げおおせ、城外の政府軍との連絡を果たしました。明治10年3月4日田原坂で戦死。享年25。宇蘇浦官軍墓地に葬られています。



谷村計介(MAP B-1)

玉東 横平山の戦い

(マップ: B-2)

三大激戦地の一つ、横平山

横平山は、玉東町の二俣台地南端にある標高144mの小高い山です。三の岳から発する尾根の末端に位置し、田原坂を見渡すことのできる位置にあります。

二俣の政府軍仮本営や砲台の側面にあたり、また、薩摩軍本営がある植木の木留に通じる道が傍らを通ることから両軍にとって要衝の地でした。



現在の横平山(MAP B-2)

警視抜刀隊との白兵戦

両軍が横平山の重要性に気づき、激しい争奪戦が始まったのは3月9日頃です。攻防の末、一時は政府軍が占領しますが、3月15日、再度薩摩軍がこれを奪取します。そこで政府軍は主力を横平山に差し向け、一斉に横平山の薩摩軍に突撃。中腹にあった壘を奪うことに成功しました。しかし、頂上までわずかという地点で猛烈な銃弾を浴び、多くの死傷者を出しながら前進できずにいました。

そこに、南関から駆け付けた警視抜刀隊50人が加わります。山頂への援護射撃が止むと、突撃喇叭を合図に、警視抜刀隊は一団となって頂上の薩摩軍に斬り込み、同時に各隊の兵士たちも突入。薩摩軍は大混乱に陥り、多数の死者を出しながら全員が敗走します。警視抜刀隊の突入から薩摩軍の敗走まで、わずか5分だったと伝えられています。この戦いで薩摩軍兵士はもとより、政府軍抜刀隊もほとんどが死傷し、その数200人以上だったといわれます。横平山争奪戦は、西南戦争の三大激戦の一つにあげられています。

この戦いの結果、政府軍が田原坂を背面(七本方面)から攻撃することが可能となり、3月20日、田原坂の戦いにおける政府軍の圧勝につながったといわれています。

トピックス

発掘調査でわかった「横平山戦跡」

発掘調査の結果、横平山北側斜面全体にて、約600点の銃弾関係遺物が出土しました。そのほか、山腹にて刀の鏢や政府軍兵士の制服付属品などが出土しています。また、山頂部分にて当時の塹壕跡を確認。これら塹壕の配置や遺物出土状況により、政府軍の進撃方向など当時の戦闘の様子が明らかになります。



抜刀隊のものと思われる刀の鏢

植木

田原坂陥落

(マップ: B-1)

田原坂の戦いの終焉

“田原坂の戦い”最後となる3月20日、この日は夜半から雨が降り注ぎ、濃霧が丘陵をおおいました。政府軍はこの濃霧に乗じて二俣口から潜行し薩摩軍の壘に近づきます。午前6時、号砲3発を合図に、田原坂の右翼を守る薩摩軍を突破して植木へ攻め込む主力を援護するため、右翼、中央、左翼の三方向から一気に攻撃をしかけました。この時、右翼の七本方面を守備していたのは新しく配備された高鍋隊で、不意を突かれて、混乱します。

退路を断たれた薩摩軍は総崩れとなり、政府軍は薩摩軍に追撃をかけます。17日間にわたり、政府軍を阻止し続けた薩摩軍の守備隊も、政府軍の攻撃について耐え切れず撤退し、17昼夜にわたる“田原坂の戦い”は終わりました。その後も吉次峠、木留などの薩摩軍陣地はもちこたえ、植木では南北に分かれて市街戦を展開し、植木・木留の戦いは一カ月以上に及びますが、ついに政府軍が熊本城へ至ります。

この植木・玉東での戦いに政府軍が勝ったことで、全国各地にいた反政府の士族たちの薩摩軍への参加を断念させることができたといわれています。

熊本城の開城

八代から上陸した政府軍の衝背軍が、熊本城へ進軍し、籠城する熊本鎮台も合わせ、3万人を超える兵力が熊本に整いました。しかし政府軍の衝背軍に、薩摩軍は新たに募兵し、人吉にいた部隊を差し向け、この背後を攻撃するのなど、必死の戦いが繰り返され、政府軍がようやく熊本城に入城したのは、田原坂の戦いが終わり、一カ月近くもたった4月14日でした。その翌日の15日、熊本の二本木で戦況を見守っていた西郷隆盛は、夜の間にまぎれ、薩摩軍の隊士に守られて熊本をあとにしたのでした。

その後の戦い

山鹿、田原坂などで、政府軍の南下を食い止めていた薩摩軍も長期戦に疲弊し、ついに退却を余儀なくされます。吉次峠～木留～植木～鳥栖(野々島)～菊池の戦いで4月15日まで抵抗した後、党薩諸隊が熊本城、城北の戦線より撤退。熊本市内の保田窪～健軍で再起を挑み、大津～木山にも戦線を置きますが、保田窪・健軍の戦いで敗北した薩摩軍は、御船の戦いの後、人吉へ退きます。薩摩軍はここを拠点に長期戦に備えようとするのですが、それもかなわず敗走を続け、7月には都城、高鍋、宮崎より撤退。8月、ついに党薩諸隊に解散命令をだします。その後、薩摩軍の本隊600名は、可愛岳の険しい山道を政府軍の包囲を突破し、鹿児島へ向かいました。

トピックス

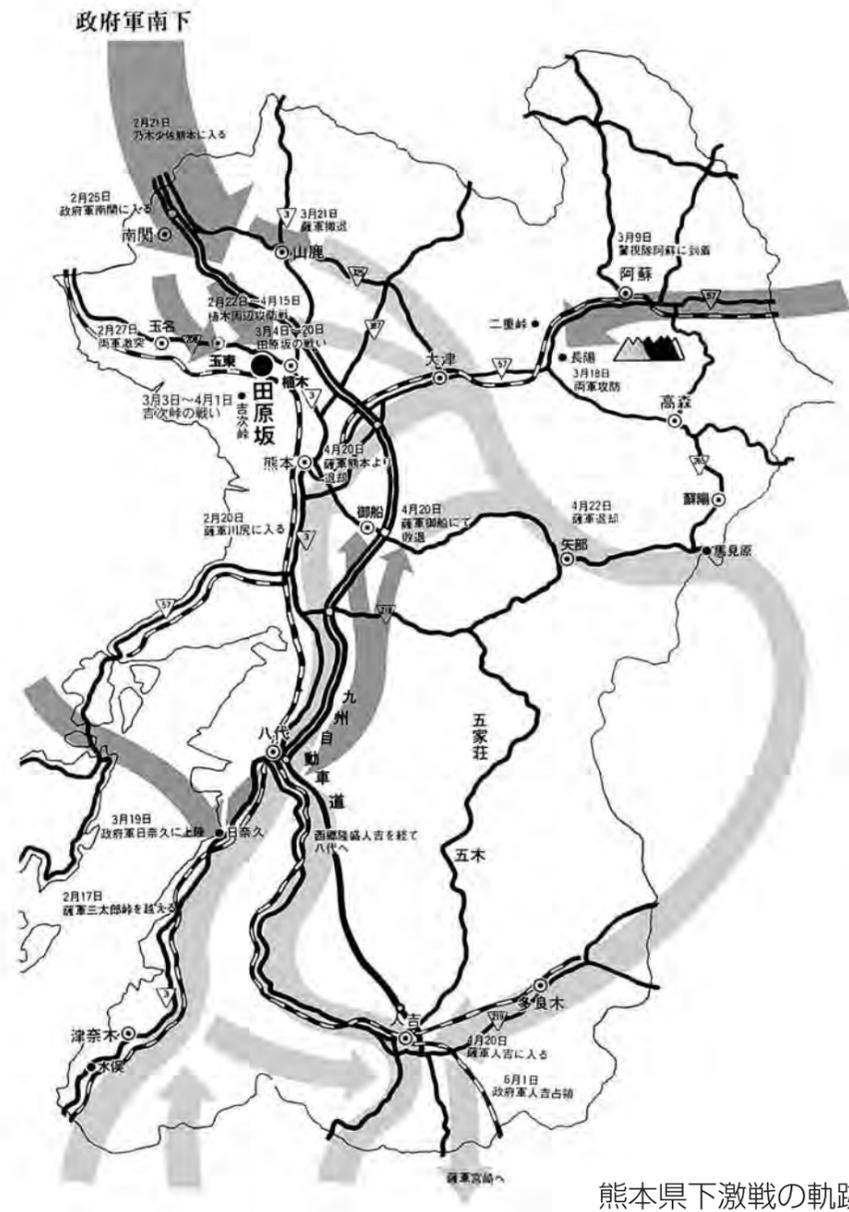
従軍記者と“田原坂の戦い”

西南戦争では、戦況を伝えるために、新聞記者が政府軍に同行し、戦場の様子を伝えていました。これが従軍記者のはしりとも言われています。

福地源一郎(桜痴)は日本のジャーナリストの草分け的人物です。1874(明治7)年、政府系の「東京日日新聞」に入社し、西南戦争勃発後、自ら戦地に向かいます。田原坂の戦いなどに従軍記者として現地からの戦争報道を行い、その記事は大反響を呼びました。また、後の第29代内閣総理大臣を務めた犬養毅も慶応義塾在学中に、「郵便報知新聞」の記者として西南戦争取材をしています。

県下各地での戦い

西南戦争では、熊本のほぼ全域と、大分、宮崎、鹿児島、南九州四県にわたる広範囲が戦場となりました。



熊本県下激戦の軌跡

●熊本市

熊本城の包囲から一時退いた薩摩軍は、再び熊本市内の健軍、保田窪に布陣しました。この際、薩摩軍の猛烈な反撃に政府軍は苦戦しますが、熊本鎮台は、砂取方面から攻撃を加え、八丁馬場を占領。一日最大の戦死者を出したといわれます。健軍方面では政府軍有利、保田窪方面では薩摩軍有利といった展開でしたが、やがて薩摩軍の弾薬も尽き、木山方面へ撤退していくことになります。

県下各地での戦い

●南関町

西南戦争までは「みなみのせき」と呼び、一説によると、戦況の電報を打つ際、文字を簡単にするため「なんかん」の四文字にしたと言われています。政府軍は大本營を正勝寺に置き、西宗寺には政府軍の病院もおかれ、乃木連隊長も高瀬(玉名)の戦いで足に銃弾を受けた際に運ばれています。いくつもの墓碑が苔むして並ぶ城ノ原官軍墓地、肥猪町官軍墓地がそのことを伝えています。



正勝寺

●山鹿市

山鹿は熊本から北九州・小倉へ通じる豊前街道の要路に当り、薩摩軍の田原坂陣地から北に延びた戦線の重要な拠点を構成していました。町の中心部の旅館は薩摩軍の本営になりました。オブサン古墳の入口の蓋石には多くの弾の痕があるほか、博物館前の民家には一本の柱に10個の弾痕が残るなど農家をも巻き込んだことがよく分かります。



オブサン古墳

●御船町

西南戦争の難を避けるために、熊本県庁は郊外の御船へ移されました。御船町では二度にわたり激しい攻防がありました。薩摩軍三番大隊長永山弥一郎は、町なかの一軒の家に百円を渡し、火を放って自決しました。当時の百円は立派な家が新築できる金額です。永山の人柄とその壮烈な最後は御船の町の郷土史の一頁を飾っています。



永山弥一郎自害の地

●山都町

薩摩軍は矢部(現山都町)に退き、西郷隆盛もここに入り薩摩軍の主力が矢部に集結しました。このときは総勢わずか3,000人余になっています。本營を酒造家備前屋、今の通潤酒造という所に構え、全軍の指揮は桐野利秋がとりました。矢部で戦いはありませんでしたが、薩摩軍はここから三つに分かれて人吉へ向うこととなります。西郷隆盛は籠に乗り、人目を避けて人吉へ退きました。



通潤酒造

●南阿蘇村

「鬼官兵衛」と呼ばれた佐川官兵衛は戊辰戦争のときは薩摩・長州の兵に追われ、後に西南戦争が始まると今度は政府軍として薩摩軍と戦い、壮烈な戦死を遂げました。佐川官兵衛の戦死の場所は、熊本地震までは西南の役公園となっており、数基の記念碑と共に墓が並んでいました。



佐川官兵衛足跡碑

●八代市

球磨川河畔でも両軍が激突しました。薩摩軍は形勢不利のため先を争って球磨川へ飛び込み逃げ、それを堤防の上から政府軍が撃ち、川が真っ赤に染まったといわれます。熊本協同隊の宮崎八郎は、堤防で戦っていた薩摩軍三番大隊小隊長辺見十郎太の身代わりとして、指揮旗を持ち仁王立ちになり弾を受けました。



宮崎八郎の碑

●人吉市

西南戦争の開戦前、西郷隆盛は人吉から舟で球磨川を下って熊本へ向います。また、敗走する時には人吉の新宮家屋敷に泊まり、魚釣りや狩りにもおもむいています。人吉城跡、青井神社、永国寺、造り焼酎酒家の古い土蔵などには、当時の物語が多くのこっています。



新宮屋敷

西南戦争終結まで

田原坂や吉次峠をはじめ、熊本県内各地での戦いに敗れた薩摩軍は、人吉での戦いを経て、宮崎県各地を転戦し、敗走を続けます。やがて政府軍の攻撃に、降伏する部隊も出てきました。西郷隆盛は「解散令」を出し、熊本隊を始め九州各地から集まった部隊は、政府軍に降伏し、自害する者もいました。

薩摩軍は、政府軍との戦いを続けながら南下し、9月1日故郷、鹿児島に着きます。また、それを追って政府軍は、薩摩軍が立てこもる鹿児島市街北部にある丘、城山^{しろやま}を包囲します。その頃、薩摩軍はすでに弾薬や食料が底をつき、兵士の数も総勢370人ほどになっていました。

9月24日、城山めがけて政府軍の激しい砲撃が始まりました。西郷隆盛は被弾して負傷。六・七連合大隊長^{べっぶ しんすけ}別府晋介の介錯により自害したといわれています。享年51でした。その死を見届けた桐野、村田、別府らの諸将も自害し、西南戦争は終結しました。

西郷隆盛が自害する4カ月前、木戸孝允が京都で病死し、翌明治11年^{おおく ほ としみち}、大久保利通が暗殺されます。「維新の三傑^{いしん さんけつ}」と呼ばれた木戸、西郷、大久保は、明治新政府樹立の中心を担った人物でした。彼らは新しい時代の礎となりそれぞれ違った立場での最後を迎えたのでした。



城山

多大な死傷者を出した西南戦争

薩摩軍は党薩諸隊を含め総勢約5万人。対する政府軍は約6万人が戦争に加わりました。計11万人のうち1万4千人がこの戦争で亡くなったといわれます。薩摩軍もそれを制圧した政府軍も国家の繁栄を想いその命を捧げたのです。

国家動乱の中、尊い命を失われた方々がいたことを、激戦の地植木・玉東地域を訪れた際には思い起こして下さい。そして現在の日本が形作られた証として、私たちは西南戦争を学び、考え、平和な世の中が続くように、次の世代に伝えていかねばなりません。

西南役戦没者慰霊之碑(田原坂公園内 MAP B-1)
毎年3月20日には、慰霊祭が行われます。

植木・玉東 戦後の復興

戦禍に見舞われた植木・玉東地域

植木・玉東地域では、住民のそれまで暮らしていた町や村が突如戦場と化しました。流れ弾に当たるなどして、多くの住民が戦争の犠牲となりました。また、両軍の進撃・退却の際に、敵が隠れないように家々に放火したため家財道具まで失うことも多々ありました。『植木町史』によれば、戦火でほとんどの家屋が焼かれてしまった村が数多くあったそうです。また、焼失はまぬがれても、避難している間に財産を奪われてしまった住民も多く、農作業もできず、収穫は激減しました。

『玉東町史』によると、弾薬等の武器やけが人を運搬するために、一部の薩摩軍に強制的に無賃金で働かされ、脅迫されて米や酒、食糧やわらじを提供したり、食事の炊き出しまでさせられた住民たちもいたということです。

一方、現金収入を得る為、餅やわらじを売り歩くなど、たくましく戦禍を乗り切る一面も見られまし

た。戦後は、家族や家財を失った住民たちへの政府の救済や補償制度が急ごしらえであったために混乱を招きます。学校も火事で焼かれていたため、教育の場も失われ、教職員は免職されることもあったそうです。

植木・玉東地域の住民たちは、戦中戦後の厳しい状況の中で、家や財産を失い、家族を失った悲しみや人の死を目の当たりにした恐怖、戦後の不十分な救済制度などの苦境を乗り越え、長い年月をかけて、復興の歩みを進めていきました。

植木・玉東地域の現在の姿は、こうした先人たちの地道な働きによりもたらされたものです。

トピックス

南北戦争と西南戦争

西南戦争では、1861～1865年にアメリカで起きた南北戦争で使用された中古銃・弾薬などを、政府軍が購入し使用しました。アメリカが百年余りという短期間で、急速な近代化を遂げた背景には、反近代化の旧勢力との間で経験した、南北戦争を転換期としています。これは日本の西南戦争でも同様であり、近代化を推し進めるにあたり、戦争という手段で旧勢力が一掃されたことで、民主主義と近代資本主義の急速な発展がなされたという側面があります。南北戦争は、南部の農園資本対北部の近代資本主義の対立であり、西南戦争は、旧士族と新政府の戦いでした。アメリカでは南部の奴隷制の廃止、北部の工業化の促進等が成され、日本では士族による武力闘争の終焉、言論による政党議会主義時代を迎え、富国強兵による中央集権国家の成立、産業資本の成長による近代化の促進という転換がなされました。

全国にある兵士たちの墓

西南戦争後の1878(明治11)年、政府は戦争で亡くなった政府軍兵士の墓所を造りました。現在の「官軍墓地」や「官修墓地」といわれるところです。全国に51箇所あるといわれ、九州各地の激戦地や病院があった長崎や、大阪にも造られました。

墓地は、戦争中、仮埋葬されていた遺体を改葬し、1体ごとに墓石が建てられています。墓石には砂岩を利用するものが大半であったため、雨風によって劣化が進み、現在は立て替えられるか合葬されているところもあります。

玉東町にある高月官軍墓地は、現在残る官軍墓地の中では最大規模のもので980名の墓石が並んでいます。主に田原坂や吉次峠、横平山での戦死者が葬られ、植木・玉東地域での壮絶な戦いを物語っています。

一方、薩摩軍は賊軍として扱われたため、政府軍のような立派な墓地は造られませんでした。その遺体は、土をかけられただけの野ざらしの状態だったといいます。これらは、戦後の衛生管理の問題から、熊本県の通達により、地中深く埋められました。戦後、遺族によりその多くは故郷に戻りました。植木の薩摩墓地のように多くの遺体が合葬されたり、玉東町白木の薩摩三勇士の墓のように、地域の住民によって手厚く葬られた例もありますが、石を積んだだけの無縁仏もいまだに残っています。



七本官軍墓地 (植木)



薩摩墓地 (植木)



薩摩塚 (植木)



高月官軍墓地 (玉東)



宇蘇浦官軍墓地 (玉東)



薩摩三勇士の墓 (玉東)

全国各地へ送られた薩摩軍兵士たち

西南戦争に従軍して投降した薩摩軍兵士たちは、長崎で裁判を受け、約2,700人が北海道を除く全国の監獄へ送られました。中には獄中で病死した者や、刑期を終えても鹿児島に戻らず、その地に残った兵士もいました。全国にはこうした薩摩軍兵士たちの墓が数多く残っています。

鹿児島県人七士の墓

西南戦争に薩摩軍として従軍した後、戦後、宮城県の大森監獄に収監された305名は、自ら宮城県の開発を願い出て、これに大きな功績を残したとされています。この墓は、そのうち獄中で病死した13人のもので、もともとは13基ありましたが遺族によって引き取られ、7基が残ったといわれています。



鹿児島県人七士の墓 (瑞鳳寺)
宮城県仙台市青葉区



墓地名	所在地
1 宇蘇浦官軍墓地	熊本県玉名郡玉東町木葉
2 高月官軍墓地	熊本県玉名郡玉東町木葉
3 七本官軍墓地	熊本県熊本市北区植木町藤
4 明徳官軍墓地	熊本県熊本市北区明徳町
5 城ノ原官軍墓地	熊本県玉名郡南関町南関
6 肥猪官軍墓地	熊本県玉名郡南関町水戸
7 下岩官軍墓地	熊本県玉名郡水戸町
8 高瀬官軍墓地	熊本県玉名郡高瀬
9 有明堂陸軍墓地	熊本県山鹿市山鹿有明堂
10 月見殿官軍墓地	熊本県菊池市大字隈月見殿
11 小峯官軍墓地	熊本県熊本市中央区黒髪
12 花岡山陸軍埋葬地	熊本県熊本市西区横手
13 城山上代官軍墓地	熊本県熊本市西区城山上代町北浦
14 若宮官軍墓地	熊本県八代市市場屋町
15 横手官軍墓地	熊本県八代市大手町
16 永尾官軍墓地	熊本県宇城市不知火町大字永尾字河添
17 田浦官軍墓地	熊本県豊北郡芦北町田浦町
18 峰崎官軍墓地	熊本県豊北郡芦北町大字花園字峰崎
19 陣内官軍墓地	熊本県水俣市古城
20 尾の上官軍墓地	熊本県天草市牛深町舟津
21 山川招魂社	福岡県久留米市山川町
22 福岡県殉難警察官之墓	福岡県福岡市中央区平和
23 西南の役軍人墓地	大分県大分市牧 松栄山 大分県国神社境内
24 佐伯官軍墓地	大分県佐伯市白坪区 岡の谷招魂所
25 高千穂官軍墓地	宮崎県西臼杵郡高千穂町
26 坂元官軍墓地	宮崎県えびの市坂元
27 細島官軍墓地	宮崎県日向市大字日知屋字遠ヶ崎
28 岡富官軍墓地	宮崎県延岡市北小路
29 岩川官軍墓地	鹿児島県曾根郡大隅町岩川
30 祇園州官軍墓地	鹿児島県鹿児島市清水町
31 佐古招魂社	長崎県長崎市西小島
他 大阪靖国軍人墓地	大阪市官修墳墓

墓地名	所在地
32 七本薩摩墓地	熊本県熊本市北区植木町藤
33 田原坂公園の薩摩塚	熊本県熊本市北区植木町藤
34 薩摩三勇士の墓	熊本県玉名郡玉東町上白木
35 熊本隊の墓	熊本県上益城郡御船町下辺見
36 日向佐土原隊戦没合葬碑	熊本県下益城郡美里町
37 南洲墓地	鹿児島県鹿児島市上巻尾町
○ 佐土原藩島津隆次郎の墓	○ (南洲墓地)
○ 少年隆土池田孝太郎の墓	○ (南洲墓地)
○ 桂久と別府景長(晋介)の墓	○ (南洲墓地)
○ 中津隆士の墓	○ (南洲墓地)

九州の西南戦争関連墓地

薩摩墓地は把握できているもののみ示しています。

医療技術の発達と博愛精神の芽生え

幕末の頃から、西洋医学の欧米人医師に日本人医師も医療技術と西洋医学の精神を学んでいました。その精神とは「医は仁術、医師は等しく傷病者の為、敵味方、貧者、身分を問わず治療する天職にある」とする近代医学の精神であり、これは神の元に人は平等であるというルターの宗教改革に始まり、ルソーの人権平等思想から生まれたものでした。これが赤十字精神の源であり、西南戦争はまさにその実践の場だったのです。

熊本隊に同行した旧肥後藩医、鳩野宗巴も身分の区別なく治療にあたり、また、博愛社創設を訴えた佐野常民も医学博士として、欧米視察の際、スイスのアンリ・デュナンが提唱した負傷者治療の為に赤十字運動の広がりを感じ、医療技術を学びながら、この博愛精神を日本にもたらすこととなります。

日本赤十字社の前身“博愛社”の設立

ヨーロッパ視察で敵味方の区別なく救護する赤十字活動に深く感銘を受けていた、元老院議員佐野常民は、西南戦争で多くの死傷者がいることを伝え聞き、その救護活動が急務なことを痛切に感じ、「博愛社」の創設を決心しました。しかし、「敵味方の区別なく救護する」という考えが理解されず、政府に申し出を却下されたので、熊本県庁やジェーンズ邸で指揮をとっていた征討総督有栖川宮熾仁親王に直接創設を願い出ました。

5月3日、許可を得るとすぐに、同じ元老院議員だった大給恒と共に、木葉周辺の大綱帯所に博愛社をおき、赤十字の精神に基づき、負傷兵の手当を行ったといわれています。救護に当たった人は120人、救護を受けた人々は、明らかになっているだけでも1,429人に及びます。これが日本赤十字運動の起こりといわれています。1886(明治19)年、日本もジュネーブ条約に加盟し、翌年、博愛社から日本赤十字社と名前を改め、佐野常民が初代社長に就任しました。現在、博愛社創設請願書を提出した5月1日を日本赤十字社の創立記念日としています。

※大綱帯所 戦場で負傷した兵士を収容し、手当する施設



ジェーンズ邸
1871年(明治4)年に西洋文化を取り入れるため洋学教師ジェーンズを招いて、熊本城の一角に設立され、西南戦争当時は、建物が政府軍に利用されていました。田原坂の戦いの後、博愛社創設の願い出がなされました。



正念寺(MAP B-1)
木葉の官軍綱帯所の一つと思われる。山門には当時のまま生々しい銃弾跡が残る。



徳成寺(MAP A-1)
木葉の官軍大綱帯所の一つ。本堂は当時のままの姿。

旧肥後藩医師団の活躍

明治元年(1868年)戊辰戦争の時、明治政府は横浜に英国の軍医ウィリアム・ウィルスを院長に軍事病院を設けて、戦傷者の洋式治療に当てましたが、肥後藩は八世鳩野宗巴を5カ月間同所に派遣し、治療と修行に当たらせました。此の時に西洋医学と共に、当時ヨーロッパで設立された国際赤十字(1863年スイスに設立)の、敵味方や身分、貧富等も一切差別しない医師としての博愛精神も欧米の医師達から学んだと思われます。明治10年、西南戦争の時は鳩野宗巴は妙体寺町に医院活人堂・病室養生軒・医学塾亦楽舎を構え有名となりましたが、2月19日、熊本城天守閣の炎上の時に上林・上通・坪井と延焼、鳩野家も全焼しました。

同家は明治維新の折の廃仏毀釈で廃庵になっていた当拝聖庵跡に避難しました。2月23日、薩摩軍熊本隊の池辺吉十郎から攻城戦での戦傷者の治療を依頼された宗巴は、官軍、薩摩軍の別なく治療することを条件に承諾しました。

4月15日、薩摩軍が御船・矢部と転戦すると、熊本隊・協同隊・龍口隊も全員が行を共にして人吉・鹿児島・宮崎の各地で戦いましたが松岡独醒庵・狩野庄馬・村井同吉は陣中医として同行し、8月17日、延岡の長井村で党薩諸隊の全軍解隊して降るまで、傷病兵の治療看護を続けました。

これは、日本赤十字活動のはじまりといわれる、佐野常民・大給恒が官の裁可を得て博愛社を設立し治療を開始した5月27日より94日も前のことでした。

※参考:拝聖院(熊本県熊本市室園町)境内説明板より



拝聖院
入り口には鳩野宗巴の胸像が建てられ、境内には「細川藩医師結集の地」の碑があります。



西南戦争時の医療活動を描いた錦絵
正念寺蔵



佐野常民書 正念寺蔵 「有栖川宮総督に願い書を提出し許可をうける佐野常民」
日本赤十字社蔵



赤十字運動のはじまり

1859年、イタリア統一戦争において、フランス軍、サルデーニャ軍の連合軍とオーストリア軍との間で、イタリアのソルフェリーノを中心に激しい戦いが行われました。この戦いでは夥しい数の戦死傷者が出ました。フランス軍を率いるナポレオン3世の元を訪れていたスイスの銀行家アンリ・デュナンは、戦場の惨状、負傷兵の粗雑な扱いに強い衝撃を受け、手当てに奔走した自身の経験と、兵士の証言などを元に「ソルフェリーノの思い出」と題した書籍をスイス帰国後出版。敵味方区別なく負傷者の治療にあたる専門機関の結成を訴え、これが反響を呼び、後の赤十字運動へと広がっていきました。

日本近代化へのあゆみ

軍備の近代化へ

西南戦争は、大規模な近代戦として、その後の日本陸軍の軍統制にも多大な影響を及ぼし、新政府は、作戦に必要な物資の補給や整備、連絡など近代戦に必要な経験や知識を得ることになります。

西南戦争では、農家、商人出身者など徴兵された政府軍が、士族に勝ったことで、徴兵制による軍隊の設立に拍車がかかります。一方で、近距離での戦い(白兵戦)では薩摩軍に対抗できず、急きよ編成した警視庁の抜刀隊が活躍したことを受け、剣術訓練などが見直され、警視庁を中心に復興しました。

また、西郷隆盛を総大将とした薩摩軍の士気の高さから、兵士の戦意など精神鍛練も重視されるようになり、明治政府は天皇を陸海軍の大元帥にいただき、参謀本部を設け、軍令を独立させて有事に即応できる体制を整えるなど、軍事力を強化するようになりました。

近代資本主義へ

西南戦争にかかった費用は、当時の国家予算の殆どを使い果たすほど莫大な支出となりました。政府は、戦費を調達するため、不換紙幣を乱発し、激しいインフレが発生しました。このため、流通する不換紙幣を回収するために、日本銀行を設立し、日銀券を発行して通貨制度の統一などをはかりました。しかしこれがデフレを引き起こし、物価は暴落。農産物の価格の下落により、農民を没落させます。一方で、紙幣の信用が高まり、経済活動は活性化し、一部の大地主や財閥資本家が現れるきっかけとなりました。その結果、大規模な資金の投資ができるようになり、産業の近代化を進めることになりましたが、貧富の格差は拡大しました。

自由民権運動の発展

不平士族の反乱は、明治政府の独断的政策に強制的に従わせようとする事への反発でもありましたが、この反発は武力による反政府運動から議

論を通じた自由民権運動へと移り変わっていきます。憲法の成立、議会の開設、地租の軽減、言論の自由や集会の自由など掲げ、全国的な、民衆を巻き込んだ運動となって展開していきます。これは帝国議会の開設頃まで続きました。

西南戦争を戦った人物たちのその後

西南戦争により、西郷隆盛をはじめ、明治政府樹立に貢献した多くの人材が失われましたが、その後の日本の政治は、近代化へ向けて急速に動いていきます。西郷隆盛とともに征韓論争で破れ、政府を去った板垣退助が自由民権運動や、国会の開設に貢献するなど、武力闘争を終えた旧士族は、その後、政党を結成し、言論による政治参加を行います。

また、西南戦争で費用の調達や、その後の財政運営にあたった大隈重信など、政府軍、薩摩軍として戦った人々も近代化を進める政府の役職につき、政治を担っていきます。

一方、乃木希典などの軍人たちは、近代的な軍事制度の確立とともに、その後に起きた日清戦争、日露戦争などに関わっていきました。

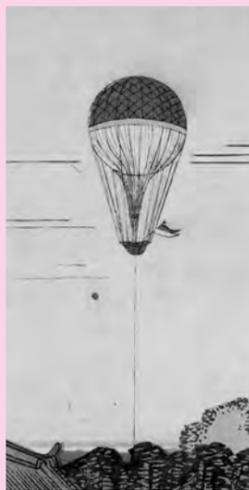
トピックス

西南戦争はじめて物語

日本で最初の軍用気球

薩摩軍に包囲された熊本城との連絡を取るために、軍用気球の開発が行われました。この際、実用化は見送られましたが、その後、気球隊が組織され、日露戦争の際には戦況偵察などで利用されました。航空機の発達などで次第にその活用の場は失われますが、太平洋戦争末期には、風船爆弾として発展することになりました。

明治12年に岡山城内で行われた
民立勲業博覧会の錦絵より
岡山県立図書館蔵



年表 西南戦争の動き

年月日	動き
明治 6年 10月 23日	西郷隆盛、征韓論に敗れ辞表提出。桐野、篠原ら西郷派士官辞職。
11月 10日	西郷、桐野とともに鹿児島へ。
明治 7年 2月 4日	「佐賀の乱」起こる。
明治 9年 10月 24日	熊本で「神風連の変」起こる。
10月 27日	福岡で「秋月の乱」起こる。
10月 28日	山口で「萩の乱」起こる。
明治10年 1月 29日	私学校党、鹿児島で暴挙。
2月 14日	薩摩軍、順次鹿児島を発つ。(～17日)兵 13,000人。
2月 18日	政府軍 乃木希典(陸軍少佐)第十四連隊の一部を率いて熊本に向かう。
2月 19日	鹿児島暴徒征討令。熊本城炎上 ～21日まで市街延焼。
2月 20日	薩摩軍の先鋒、別府晋介の二大隊川尻に入る。 民権党(40数名)保田窪神社へ結集、熊本協同隊結成。
2月 22日	政府軍第十四連隊、連隊旗を奪われる。薩摩軍、熊本城を攻撃(植木・玉東での本格的な戦闘開始)。
2月 23日	政府軍第十四連隊、木葉にて敗れる。
2月 24日	山縣参軍博多に到着。薩摩軍熊本城強攻を中止、主力は山鹿、田原、木留に進出。
2月 25日	政府軍第一、二旅団南関に入る。高瀬の戦い。
2月 27日	薩摩軍三方より高瀬を強襲、西郷小兵衛戦死 乃木少佐負傷。
3月 3日	政府軍、木葉・吉次に攻撃を開始。
3月 4日	田原坂の攻撃開始～3月20日 田原坂の戦い。 薩摩軍一番大隊長篠原国幹、玉東町原倉六本桶で戦死。
3月 19日	高島鞆之助の別働第二旅団、船で日奈久に上陸。
3月 20日	政府軍、田原坂を占領。
3月 26日	薩摩軍、石塘口をせき止め、熊本城を水攻めにする。
4月 1日	政府軍、吉次・木留を占領。
4月 8日	荻迫柿ノ木台場陥落。
4月 12日	政府軍、御船を占領、永山弥一郎(薩摩軍三番大隊長)戦死。
4月 14日	政府軍、熊本城入城。
4月 15日	薩摩軍、植木・荻迫・鏡田・三ノ岳より退去(植木・玉東での戦いが終わる)。
4月 20日	政府軍、御船で大勝 薩摩軍、矢部に退去、西郷らは人吉へ退去。
5月 28日	西郷、宮崎へ入る。
6月 1日	政府軍、人吉を占領。
7月 31日	政府軍、宮崎佐土原を占領。
8月 2日	政府軍、高鍋を占領。
8月 14日	政府軍、延岡を占領。
8月 16日	西郷、解隊布告。
9月 1日	西郷ら、鹿児島に入る。
9月 22日	城山で西郷の命による決死の抵抗。
9月 24日	政府軍、城山を総攻撃。西郷、桐野、村田ら戦死す。西南戦争終結。

トピックス

西南戦争を題材にした文学、映画等

小説

「灰 燼」 徳富蘆花

徳富蘆花は熊本が生んだ代表的作家。戦いに敗れた旧家の若者が、家名を守るために自刃させられていく悲劇を描いています。戦袍日記の記録に記された事件を背景に書かれたとされ、小説では舞台が豊前の国、中津の城下より三里ばかり西南に離れた某山村（ほうさんそん）となっていますが、モデルとなったのは徳富一家が戦火を避けて逃げた熊本市郊外の沼山津（ぬやまづ）で、実際にそこで起きたことを見聞し、物語に仕上げたといわれています。

「城下の人」 石光真清

石光真清の自伝。明治の激動期の熊本の様子が描かれています。西南戦争のとき、真清は10才。「城下の人」には彼が少年の頃経験した西南戦争のことが詳しく書かれ、熊本城炎上も強い印象で焼きついてたようです。「二月十九日も、身を切るような寒い風が強く吹き荒んでいた。お午近くである。にわかにも門前が騒々しくなった。『お城に火がついたぞ!』と叫ぶ声が聞こえて来た。私はびっくりした。父はもっと驚いて立ち上がった…」

- 小泉八雲 『橋の上』
- 落合直文 『孝女白菊』
- 渡辺淳一 『光と影』
- 勇 知之 『志に生きた男たちの足跡—西南戦争 田原坂激戦』他
- 司馬遼太郎 『翔ぶが如く』
- 三好 徹 『青雲を行く』
- 池波正太郎 『西郷隆盛』『人斬り半次郎』
- 赤瀬川 隼 『朝焼けの賦 小説村田新八』

他



ドラマ

「田原坂」

日本テレビ 年末時代劇 1987年
出演 里見浩太朗 他

「翔ぶが如く」

NHK 大河ドラマ 1990年
出演 西田敏行、鹿賀丈史 他

映画

「灰 燼」

監督 村田 實
出演者 中野英治、夏川静江 他
制作年 1929年
制作国 日本
配 給 日活
上映時間 60分

「ラストサムライ」

監督 エドワード・ズウィック
出演 トム・クルーズ
渡辺 謙 他
制作年 2003年
制作国 アメリカ
配 給 ワーナー・ブラザーズ映画
上映時間 154分

「半次郎」

監督 五十嵐 匠
出演者 榎木孝明 他
制作年 2010年
制作国 日本
配 給 ピーズ・インターナショナル
上映時間 121分

植木・玉東の地に伝わる、西南戦争こぼれ話

玉東町

- 玉東住民の最初の死者は、2月22日の木葉の戦いで流れ弾に当たって死んだ上木葉村農家の長男（13歳）でした。彼は、突然村が戦場となり便所に隠れましたが、そこに弾丸が飛び込んで来て頭に当たり死亡してしまいました。
- 3月初めの吉次峠での戦いで、原倉村住人16歳が、穴かまどに逃げ込んでいましたが、そこに砲弾が命中して亡くなりました。
- 薩摩軍が村に来ると民家が邪魔になるので全部焼いてしまうと、政府軍から連絡があった。住民は不平、不満でブツブツ言いながらも、言われた通りしないと後が恐いので、山の方に家財道具を運び出したが大変だった。

た。連絡があった2、3日後に全部の家に火を付けて焼いてしまいました。

- 家の上の畑に登ったところ、政府軍が酒盛りをしていた。「お前も飲め」と言って無理に酒をすすめ串に刺したさかなをくれたので「これは何というさかなですか」と聞くと「これは薩摩軍というさかなだ」というので恐ろしくなって逃げ出したと言っていました。
- 政府軍を賄うのに人手が足りないの、この村の人たちは全部駆り出されていました。そして握り飯を作ったり、負傷者を運んだりさせられました。

出典：『歴史への招待 西南の役と玉東町』

熊本市北区 植木町

- 祖父の話。初め薩摩軍がたむろしていた。やがて政府軍が入ってきて「どっちの味方か」と聞くのでとっさに「政府軍」と答えて助かった。彼らは、薩摩軍が隠れていないか、片っぱしから火を付けた。
- 祖父と父の話。政府軍が入ってきた時、逃げ遅れた薩摩軍兵士をかくまった家がある。政府軍が家々に火を付け薩摩軍兵士をあぶりだそうとしていたが、その家の人間が「薩摩軍は決して隠れていません」と頼んだので政府軍は何もせず立ち去り、隠れていた薩摩軍兵士は泣いて別れを惜しんだ。
- 父が薩摩軍に参加したのは、数え年で17歳の時。8月に熊本隊が政府軍に降伏したがそれを知らないまま各地を転々とした。ある村で仕事を習いながら家族同様に

かわいがってもらっていたところ、薩摩軍兵士と分かり故郷へ返された。若かったので罪はまぬがれた。

- 祖父の話。薩摩軍が入ってきて、周辺の家々を宿にした。飯炊きや風呂炊きに住民をこき使い、刀で脅す者もいた。家族は家を出て窪地や壕に入り、布団などを弾よけにして住んだ。薩摩軍が敗れた後、家に帰ると村はほとんどが焼かれていた。
- 父の話。戦いのあった翌日、堀畑に将校が倒れていた。家の墓に埋葬した。七本に政府軍の墓ができる時その遺体は発掘されていった。この将校が河原林少尉であった。

出典：『植木町史』

トピックス



薩摩軍食

政府軍食

西南戦争と食糧事情

川口武定が記した『従征日記』からは、当時の軍の食事情を伺うことができます。食事は、兵の士気にかかわることであるため、かなり気が使われていたようです。戦闘当初の政府軍では、精米1合の「団飯（おにぎり）」2つが紙に包まれて支給されていました。その後、肉などおかずも充実していきます。

西南戦争関連項目一覧 両軍の編成

政府軍の編成

征討総督		有栖川宮熾仁親王	
参軍		陸軍中将	山縣有朋
参軍		海軍中将	川村純義
第一旅団	旅団長	陸軍少将	野津鎮雄
	参謀長	陸軍中佐	岡本兵四郎 陸軍中尉 鮫島重雄
第二旅団	旅団長	陸軍少将	三好重臣
		陸軍少将	大山巖(別働第一旅団司令官兼任)
		陸軍大佐	黒川通軌
第三旅団	参謀長	陸軍大佐	野津道貫
	旅団長	陸軍少将	三浦梧楼
第四旅団	参謀長	陸軍大佐	揖斐章
	旅団長	陸軍少将	曾我祐準
別働第一旅団	参謀長	陸軍中佐	品川氏章
	旅団長	陸軍少将	高島鞆之助 陸軍少将 大山巖
別働第二旅団	参謀長	陸軍中佐	岡澤精
	旅団長	陸軍少将	山田顕義
別働第三旅団	参謀長	陸軍大佐	黒川通軌(別働第四旅団長兼任)
	旅団長	陸軍少将兼大警視	川路利良
別働第四旅団	参謀長	陸軍少将	大山巖(別働第五旅団司令官兼任)
	旅団長	陸軍中佐	中村尚武
別働第五旅団	参謀長	陸軍大佐	黒川通軌(別働第二旅団参謀長兼任)
	旅団長	陸軍中佐	山地元治
新撰旅団	参謀長	陸軍少将	大山巖(別働第一旅団長兼任)
	旅団長	陸軍中佐	品川氏章
熊本鎮台	参謀長	陸軍少将	東伏見宮彰仁親王
	司令官	陸軍中佐	長坂昭徳
歩兵第十三聯隊	参謀	陸軍少将	谷干城
	聯隊長	陸軍中佐	樺山資紀
第一大隊	大隊長	陸軍少佐	兎玉源太郎
	大隊長	陸軍少佐	與倉知實
	大隊長	陸軍少佐	奥保鞏
第二大隊	大隊長心得	陸軍少佐	林隼之助
	大隊長心得	陸軍大尉	小川又次
	大隊長心得	陸軍少佐	乃木希典
第三大隊	大隊長心得	陸軍少佐	津下弘
	大隊長心得	陸軍大尉	青山朗
	大隊長心得	陸軍少佐	吉松秀枝
砲兵第六大隊	大隊長心得	陸軍大尉	塩屋方囿
予備砲兵第三大隊	大隊長	陸軍大尉	左乙女英武
工兵第六小隊	小隊長	陸軍大尉	筒井義信
海軍		海軍中将	川村純義
その他			
合計			約60,000人

薩摩軍の編成 (判っているもの)

私学校党 計	約13,000人	
薩摩軍総指揮官		
参謀格		西郷隆盛
副官		淵辺高照
		仁礼景通
一番大隊	大隊長	篠原国幹
	小隊長	西郷小兵衛
二番大隊	大隊長	村田新八
	小隊長	松永清之丞
三番大隊	大隊長	永山弥一郎
	小隊長	辺見十郎太
四番大隊	大隊長	桐野利秋
	小隊長	堀新次郎
五番大隊	大隊長	池上四郎
	小隊長	河野圭一郎
六・七連合大隊大隊長		
六番大隊	大隊長	別府晋介
	大隊長	越山休蔵
	小隊長	袖木彦四郎
七番大隊	大隊長	鮫島敬輔
	小隊長	児玉強之助
貴島大隊	大隊長	坂本敬介
砲一番隊	大隊長	貴島清
	砲隊長	岩元平八郎
	砲隊長	讃良清蔵
砲二番隊	砲隊長	餅原正之進
	砲隊長	田代五郎
	砲隊長	桂宗右衛門
	砲隊長	柴山四郎兵衛

党薩諸隊・徴募隊 計	約17,000人	
徴募隊		
約10,000人		
党薩諸隊	熊本隊	池辺吉十郎 佐々友房
	熊本協同隊	宮崎八郎 平川惟一 広田尚
	龍口隊	中津大四郎
	高鍋隊	石井習吉 平島重綱 坂田諸潔
	延岡隊	大島景保
	飢肥隊	伊東直記 川崎新五郎
	佐土原隊	島津啓次郎 鮫島元
	報国隊(竹田隊)	堀田政一
	人吉隊	黒田等久麿 村田量平
	中津隊	増田宋太郎 後藤純平

合計	約30,000人
----	----------

※ 戦後、軍事裁判にかけられた薩摩軍関係者の人数を勘案すると少なくとも約50,000人と考えられる。

西南戦争に関係する人たち

政府軍に関係する人たち

ありすがわのみやたるひと 有栖川宮熾仁 親王	皇族、政治家、軍人。王政復古後、新政府の総裁となり、戊辰戦争に東征大総督、西南戦争に征討総督として出征した。明治10年陸軍大将、22年参謀総長。明治28年死去。享年61。
おおくほとしみち 大久保利通	薩摩藩(鹿児島県)出身。政治家。幕末は西郷と共に倒幕運動に活躍し、明治維新でも政府の中心的存在となった。岩倉使節団に参加し帰国後は政治の実権を握った。木戸、西郷とともに維新の三傑と称される。明治維新に不満を持つ士族によって暗殺された。明治11年死去。享年49。
きどたかよし 木戸孝允 (桂小五郎)	長州藩(山口県)出身。政治家。松下村塾に学び尊王攘夷運動の中心人物。明治政府の中心的存在。岩倉使節団にも参加。西郷、大久保とともに維新の三傑と称される。明治10年死去。享年45。
やまがたありとも 山縣有朋	長州藩(山口県)出身。軍人、政治家。長州藩出身で、吉田松陰の松下村塾に学び、高杉晋作らと奇兵隊を率いて倒幕運動に活躍。明治維新後に新政府より欧州視察の命を受け、帰国後は新体制の形成に深くかかわった。西南戦争時には参軍を務め、政府軍全体の指揮をとった。第3・9代内閣総理大臣、初代内務大臣などを歴任。近代日本の基礎をつくった一人として中心的役割を果たした。大正11年死去。享年84。
おくやすかた 奥保鞏	小倉藩(福岡県)出身。軍人。西南戦争時は熊本鎮台第一大隊長。日清戦争では第五師団長をつとめる。明治36年陸軍大将。日露戦争では第二軍司令官として作戦を指揮。戦後参謀総長、44年元帥となる。昭和5年死去。享年85。
よくらともざね 與倉知實	薩摩藩(鹿児島県)出身。西南戦争の際、政府軍第十三連隊長、段山での戦闘で敵弾を受けた。同日に、熊本城内で妻が女子を出産したが、その顔を見ることなく、翌日息を引き取った。生年不詳。
さがわかんべえ 佐川官兵衛	会津藩(福島県)出身。警察官。鳥羽・伏見の戦いで奮戦し勇名を馳せた。家老として政府軍への徹底抗戦を唱え、敗戦後、東京での禁固生活を送った。征韓論争が起こると、政府の要請を受けて子弟300人余を率いて上京し、1等大警部となった。西南戦争では、豊後口第二号警視隊を副指揮長として率い、壮絶な戦死を遂げた。享年47。
えだくにみち 江田国通	薩摩藩(鹿児島県)出身。薩英戦争、戊辰戦争で活躍。明治7年陸軍少佐。西南戦争に近衛歩兵大隊長として出征。吉次峠で薩摩軍の篠原国幹を狙撃させ倒すが、敵弾を受け戦死した。享年30。
むらたつねよし 村田経芳	薩摩藩(鹿児島県)出身。陸軍軍人。西洋流砲術を学び、戊辰戦争に従軍。1871(明治4)年陸軍歩兵大尉。1875(明治8)年射撃技術と兵器研究のためフランス、ドイツ、スウェーデンなどに赴く。最初の国産銃である十三年式村田銃を開発。以後、再び渡欧し、村田銃の改良を重ねた。西南戦争では政府軍として戦った。大正10年死去。享年83。
かわらばやしゆうた 河原林雄太	小倉藩(福岡県)出身。少尉。政府軍第十四連隊旗手。向坂の戦いで戦死。保持していた軍旗を薩摩軍に奪われた。生年不詳。

薩摩軍に関係する人たち

さいごうこへえ 西郷小兵衛	薩摩藩(鹿児島県)出身。西郷隆盛の末弟。戊辰戦争に参加し、東北での戦いにも参戦した。西南戦争では薩摩軍一大隊一小隊長を務める。同年、高瀬の戦いにて政府軍の銃弾を受けて戦死した。享年31。
むらたしんぱち 村田新八	薩摩藩(鹿児島県)出身。年少より西郷隆盛に従い、王政復古運動、戊辰戦争などで戦った。征韓論で西郷隆盛とともに鹿児島に帰郷後、桐野利秋、篠原国幹らと私学校の経営に携わり、砲隊学校の監督を務めた。西南戦争では、薩摩軍二番大隊長として各所で奮戦。城山で最後の抵抗を遂げ戦死した。大久保利通にも将来を期待された人物。享年41。
ながやまやいちろう 永山弥一郎	薩摩藩(鹿児島県)出身。戊辰戦争で戦い、後に陸軍中佐となり、屯田兵指揮官となった。征韓論の際は、西郷隆盛らと行動をとるにせず、その後、政府の政策に反対し鹿児島へ帰った。最初は、出兵に応じず、仲が良かった桐野利秋の説得で同意した。新兵教練を担当し、西南戦争では、薩摩軍三番大隊指揮長として戦った。御船での戦いの際、周囲を敵に囲まれ、敗色濃厚となると、近くの農家を買取り自ら火を付けて自害した。享年40。
へんみじゅうろうた 辺見十郎太	薩摩藩(鹿児島県)出身。戊辰戦争、鳥羽・伏見の戦いで活躍した。征韓論で西郷隆盛らと鹿児島へ帰ると、幹部として私学校の発展に努めた。西南戦争の際は、薩摩軍三番大隊小隊長として永山弥一郎を補佐した。雷撃隊、協同隊などを率いて、先陣に立って勇猛に戦った。薩摩軍が鹿児島に帰り、政府軍に城山を占拠されると、西郷隆盛の自決を見届けさらに交戦を続けた後、別府晋介と差し違えて壮絶な最後を遂げた。享年28。
べつぶんすけ 別府晋介	薩摩藩(鹿児島県)出身。年少より桐野利秋と親しくし、戊辰戦争で活躍。明治5年、陸軍少佐となる。西郷隆盛とともに鹿児島に帰郷後、西南戦争に参戦。薩摩軍六・七番連合大隊長を務め、城山で西郷隆盛の介錯をし、その後自害した。享年31。
いけげきちゅうろう 池辺吉十郎	肥後藩(熊本県)出身。藩校時習館に学び、明治に入ると玉名郡横島村(現玉名市横島町)に居を移して私塾「池辺塾」を興した。西南戦争では佐々友房らと熊本隊を組織して、大隊長として薩摩軍に応じたが、途中熱病にかかり、政府軍に捕縛され長崎で処刑された。明治時代の政論家池辺三山はその子息である。享年39。
さくらだそうしろう 櫻田惣四郎	肥後藩(熊本県)玉東町二俣の出身。西南戦争では熊本隊の参謀として各地を転戦した。熊本隊は長井村(延岡市)で降伏後、各隊士裁判を受け各々刑に服したが、櫻田は隊長の池辺吉十郎と同じく、斬刑に処された。櫻田は和歌に通じ、弟子の古閑俊雄と共に戦時中多くの詩を残し、古閑俊雄の著作「戦袍日記」にも書かれている。享年49。
こがとしお 古閑俊雄	肥後藩(熊本県)出身。薩摩軍熊本隊の幹部として九州各地を転戦。降伏後広島監獄で獄死する。「戦袍日記」は戦争中の手記を綴ったもの。享年24。
たかだあきら 高田露	肥後藩(熊本県)出身。時習館に学び、西南戦争では協同隊を組織して政府軍と戦った。出獄後、郷里で民権運動や国会開設運動に加わり、開墾事業にも従事。明治35年衆議院議員。大正4年死去。享年62。
ひろたひさし 広田尚	肥後藩(熊本県)出身。自由民権運動家。横井小楠門下生。落校時習館、長洲の月田蒙斎塾に学ぶ。宮崎八郎らと自由民権派の学校である植木学校を設立。西南戦争が起こると熊本協同隊を結成し、薩摩軍として参戦した。西南戦争後、言論の世を目指して相愛社に参加し、自由民権思想に基づく言論活動、政治活動を行った。明治28年死去。享年53。

◆ 第4章 附編

植木の遺跡一覧

<p>1 豊岡眼鏡橋から</p> <p>2 一ノ坂 二ノ坂 三ノ坂</p>	<p>麓の豊岡眼鏡橋からの標高差は約80mの田原坂。一ノ坂、二ノ坂、三ノ坂と頂まで約1.5kmの曲がりくねった道が続く。この道だけが唯一大砲を曳いて通れる道幅があり、この道を越えなければ政府軍の砲兵隊は熊本まで進めない。ともに戦略上の拠点であり、この坂道を中心とした一帯が激戦の舞台となったのである。[国指定史跡]</p>
<p>3 谷村計介之碑</p>	<p>政府軍本営に連絡を取るために密使として熊本城を抜け出した谷村であったが、途中で熊本隊に捕まる。「老婆を残してきたので城を脱走した」と偽り、数日薩軍に身を寄せていたが隙を見て逃げ出し、見事任務を完遂した。その後、田原坂の戦いで戦死した。</p>
<p>4 田原坂公園 ・熊本市田原坂西南戦争資料館</p>	<p>田原坂公園は、いまではツツジやサクラの名所として知られる美しい公園である。西南戦争では17日間にわたる戦闘が繰り広げられた激戦地でもあった。園内には、激戦の跡が生々しい弾痕の残る家(復元)や慰霊塔・資料館が建ち、往時の戦いを知ることができる。</p>
<p>5 七本柿木台場 薩軍墓地</p>	<p>明治10年3月初旬から4月中旬まで続いた田原坂周辺の戦いで、木留・七本付近で戦死した薩摩軍や熊本隊の兵士311人が埋葬されている薩摩軍墓地。</p>
<p>6 七本官軍墓地</p>	<p>この七本官軍墓地には、「田原坂の戦い」のあと、植木や吉次・木留、辺田野・平野・滴水などで戦死した鎮台および近衛兵300余人が埋葬されている。[県指定史跡]</p>
<p>7 山縣有朋歌碑</p>	<p>激戦の地であった吉次峠に至る途中にある。昭和17年に有志により建立されたもので「木とめ山しらむ砦のすてかがり けむりとみしはさくらなりけり」と刻まれている。</p>
<p>8 辺田野熊野座神社</p>	<p>4月上旬の激戦で、乃木少佐以下9人が同神社境内で負傷。神社境内にはこの時を詠んだ乃木大将の詩碑がある。</p>
<p>9 薩軍病院跡</p>	<p>木留は薩摩軍の本営と薩摩軍病院がおかれていた場所である。また当時薩摩軍に呼応して、政府軍と戦闘を交えた各地編成の諸隊(薩摩軍に党するということから党薩軍とも呼ばれる)があった。そのうち熊本四隊(熊本隊・竜口隊・協同隊・人吉隊)のひとつ「熊本隊」の本営もあった。</p>
<p>10 荻迫柿木台場 ・薩軍美少年の墓</p>	<p>3月25日以降4月15日まで、塹壕が延々と造られ、両軍攻防の激戦が展開された場所である。また、薩摩美少年の墓といわれ、同一人物のものと思われる墓碑が二基あり、「君八日州庄内ノ人 西南の役僅十五才ニシテ薩軍二投シ奮戦此地二没ス」と刻まれている。</p>
<p>11 山頭遺跡</p>	<p>政府軍と薩摩軍が激しい銃撃戦をおこなった遺跡で、発掘調査によって政府薩摩両軍が直接銃火を交えた遺跡が発見されたのは国内で初めて。政府軍の塹壕跡からは当時最新式のスナイドル銃の薬莖が出土。薩摩軍の陣地跡からはエンフィールド銃などの雷管が多数出土した。</p>
<p>12 河原林少尉戦死の地</p>	<p>連隊旗手であった河原林少尉が、命を落とした場所。この際、薩摩軍に軍旗が奪われ、乃木少佐は、必死で奪い返そうとしたが、部下の制止で思いとどまりこれを一生の恥として、西南戦争後も乃木少佐は悔やみ続けたといわれている。</p>
<p>13 千本桜 ・乃木大将記念碑</p>	<p>明治10年2月22日、乃木少佐率いる第十四連隊は向坂で薩摩軍と遭遇。この日の戦闘が田原坂をめぐる激戦の序章となった。また、この戦闘で乃木連隊が撤退した千本桜の地には「乃木大将記念碑」がある。</p>
<p>14 植木天満宮</p>	<p>両軍の緒戦の地。2月22日、乃木少佐の前衛隊と薩摩軍の村田および伊東隊が衝突。田原坂をめぐる激戦の戦端が開かれた。</p>
<p>15 薩軍弾薬庫跡</p>	<p>薩摩軍の植木での拠点となっていた真教寺と西寺(通称)。「薩軍弾薬庫」はこの西寺にあった。田原坂で敗退した薩摩軍は植木へ退却、それを追う官軍との間で激しい戦闘が繰り広げられる。このような状況のなか、突如として大音響をたてて火薬庫が爆発、西寺を吹き飛ばした。その大爆発の理由は未だに不明となっている。</p>

玉東の遺跡一覧

<p>16 宇蘇浦官軍墓地</p>	<p>政府軍の将兵および抜刀隊として参加した警視局巡查たちをあわせ398人の戦死者を葬っている墓地で、乃木希典少佐率いる第十四連隊の吉松秀枝少佐や、武勲で有名な谷村計介の墓もある。[国指定史跡]</p>
<p>17 有栖川宮督戦の地</p>	<p>ツツジの花が趣を添える美しい公園。征討総督に任ぜられた陸軍大将・有栖川宮熾仁親王が田原坂攻略戦の戦跡を見てまわられた地であり、現在、記念碑が建立されている。[町指定史跡]</p>
<p>18 上木葉官軍本営跡</p>	<p>もとは上木葉の高田源七の屋敷跡で、田原坂占領の後まで政府軍の本営として使用された。第一・第二旅団の本営が七本に移った後も陸軍中将・山縣有朋が拠点置き、作戦指導や戦後処理などをおこなった。</p>
<p>19 正念寺 20 徳成寺</p>	<p>西南戦争で負傷した兵士を治療した政府軍病院跡。両寺とも日本赤十字社の前身「博愛社」が置かれたと伝っており、徳成寺の本堂、正念寺の山門は戦争時と変わらぬ姿で残っている。[19国指定史跡]</p>
<p>21 高月官軍墓地</p>	<p>西南戦争の激戦地であった、田原坂・吉次峠・二俣・横平山などで戦死した政府軍兵士の墓 980基が並んでいる。数ある官軍墓地の中で最大のもの。[国指定史跡]</p>
<p>22 二俣瓜生田官軍砲台跡</p>	<p>田原坂攻撃の為に設置された野戦砲台。上木葉の本営から毎日大砲が運び込まれていたという。近年の発掘調査で、大砲の轡が確認された。</p>
<p>23 横平山戦跡(公園)</p>	<p>田原坂・吉次峠と並ぶ三大激戦地跡で、戦術的に重要な地点であったところから政府・薩摩両軍の激しい争奪戦が行われた。今なお残る塹壕の跡が壮絶な白兵戦を物語っている。[国指定史跡]</p>
<p>24 吉次峠戦跡(公園)</p>	<p>三大激戦地のひとつで、薩摩軍防衛線の最後の牙城となった地である。薩摩軍が死守した吉次越えは、政府軍に「地獄峠」と恐れられた険しい場所で、両軍の間で激しい攻防戦が展開された。党薩諸隊のひとつ、熊本隊の一番小隊長佐々友房が「君見ずや吉次の険は城よりも険なり」と詠った詩が刻まれた碑が、吉次公園にある。[国指定史跡]</p>
<p>25 篠原国幹戦没の地</p>	<p>薩摩軍一番大隊長篠原国幹は、薩摩人に大変慕われた人物であった。吉次峠では、その絶妙な用兵で精強な薩摩軍を指揮し先頭に立って戦ったが、かつて篠原から親しく指導を受けていた近衛部隊の指揮官・江田少佐の指示する狙撃を受け壮絶な戦死を遂げた。篠原の胸を射抜いたのは、一説によると、後に村田銃を考案した政府軍きっての名手・村田経芳少佐だともいわれている。</p>
<p>26 薩軍三勇士の墓</p>	<p>薩摩軍荻原隊と思われる3人が葬られている。西安寺周辺の戦闘で負傷した3人は玉東町上白木の民家に匿われ治療を受けるが、その甲斐なく絶命。その地に葬られ、現在も供養の火が絶えない。</p>
<p>27 乃木希典奮戦の地</p>	<p>向坂にて連隊旗を奪われた乃木少佐率いる第十四連隊は、形勢不利の為、翌23日木葉に後退。しかし、木葉の戦いでも苦戦し、ついに退却することになる。退却した稲佐付近にて乃木は薩摩軍に襲われ落馬。大橋伍長、摺沢少尉が奮戦し身を挺して乃木を助けた。九死に一生を得た乃木は木葉川を渡り寺田へ退避して隊を集結している。</p>

熊本市北区植木町・玉東町の連携した取り組みは、多くの皆様のご協力のもと成り立っています。このことに深く感謝の意を表しますとともに、これから西南戦争遺跡が未来に保存され、我が国の歴史を学ぶために活用されることを祈念いたします。

主要参考文献等

- 『玉東町史 西南戦争編 資料編』 玉東町史編集委員会編 1995年
- 『玉東町史 研究資料(2) 吉次往還』 玉東町史編集委員会編 1990年
- 『歴史への招待 西南の役と玉東町』 玉東町 1981年
- 『植木町史』 植木町史編纂委員会編 1981年
- 『熊本県大百科事典』 熊本日日新聞社 1982年
- 『熊本の風土とところ』 熊本の風土とところ編集委員会編 1978年
- 『墓標・戦跡・慰霊碑を中心とした調査』 西南の役に関する調査報告書 植木町教育委員会 1989年
- 『西南の役 田原坂資料集「歴史のはざまに」』 植木町 植木町教育委員会 1990年
- 『西南の役戦没者名簿』 西南の役に関する第二次調査報告書 植木町 植木町教育委員会 1990年
- 『西南の役 植木地区における官薩両軍戦死者名簿』 西南の役に関する第三次調査報告書 植木町 植木町教育委員会 1990年
- 『西南戦争古写真アルバム』 熊本城顕彰会
- 『データで見る西南戦争—官軍戦死者を中心として—』 勇 知之 熊本出版文化会館 1990年
- 『日録 田原坂戦記』 勇 知之 熊本出版文化会館 1990年
- 『田原坂』 西南戦争遺跡・田原坂第1次調査 熊本市の文化財 第5集 熊本市教育委員会 2011年
- 『靖国神社 忠魂史 西南の役』 青潮社 1990年
- 『西南戦争』 小川原正道 中公新書 2007年
- 『玉東町 西南戦争遺跡総合調査報告書』 玉東町教育委員会 2012年

※この冊子では西南戦争で敵対した両軍を、政府軍・薩摩軍と表記しています。ただし遺跡名、地名等の固有名詞については「官軍」「薩軍」と記しているところがあります。ご了承ください。

※記載している内容には諸説ある場合も多いので、ご指摘や新しい情報、お問い合わせ等ありましたら、熊本市文化振興課植木分室、玉東町教育委員会までお願いいたします。

植木・玉東「西南戦争」最新情報はこちら

<http://seinansensou.jp>

西南戦争ガイドブック 植木・玉東

発行／平成23年12月改訂・第2刷 平成24年6月・第3刷 平成25年8月・第4刷 平成26年8月
第5刷 平成27年8月・第6刷 平成27年11月・第7刷 平成29年1月
第8刷 平成31年3月改訂

編集／植木町・玉東町

事務局 熊本市文化振興課植木分室
住所 〒861-0195 熊本県熊本市北区植木町岩野238番1
TEL 096-272-0551 FAX 096-272-1177

事務局 玉東町教育委員会
住所 〒869-0312 熊本県玉名郡玉東町大字白木1-1
TEL 0968-85-3609 FAX 0968-85-2276

発行元／熊本市

印刷／あすなる印刷